



『魯班経』 訳注 I

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 水野, 杏紀, 平木, 康平 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00004347">https://doi.org/10.24729/00004347</a>

## 『魯班経』 訳注 I

水野杏紀  
平木康平

## はじめに

『魯班経』は、主に民居の建物や内部の造作、外構や庭の工事などに携わる技術者、工匠のための指南書である。工匠とは建築や造作関連に携わるさまざまな技術者をいう。たとえば、木匠（大工）、石匠（石工）、泥水匠（左官）などが挙げられる。

この書の特徴は、民居の造作に関する技術指南に加え、棟上げの儀式の注意事項、さまざまな造営のための吉日選びなどの方法や禁忌、あるいは風水にもとづいた民居の門や塀の建てかた、周辺環境の吉凶、あるいは民居の災厄を除くさまざまな飾り物について、幅広く記述しているところにある。古来、建築の部材などの寸法の計測は吉凶が記された曲尺、鲁班尺が用いられたが、建築に用いる部材の寸法における陰陽五行にもとづく吉凶などについても、詳細に解説している。建築に携わる工匠が、様々な工程で趨吉避凶（凶を避けて吉に赴く）の観念を重視としていたことがうかがえる。

『魯班経』の呼称は、春秋時代の魯国の名匠、鲁班に由来する。姓は公輸、名は盤。建築に関する種々の道具を作ったといわれており、曲尺もそのひとつとされる。戦国時代の『墨子』公輸篇には、公輸盤が楚国において「雲梯」を製造し、これを用いて宋国を攻めようとしたが、それを墨子が諫めたことが記されている。

『魯班経』は魯班に仮託された書であるが、最終的に成立したのは明の萬曆年間である。書には、北京提督工部、御匠司の司正である午榮が編纂、局匠所の把總である章嚴が編輯、南京通匠司の司承である周言が校正を担当したとある。この書はそれ以降、さまざまな版本が刊行された。そのことから、民居の造作に関わる工匠らのなかで広く用いられたことがわかる。日本にも舶載され、何種類かの刊本が現存している。

『魯班経』の正式書名は、新鐫京板「工師雕斲正式魯班木經匠家鏡」、または「工師雕斲正式魯班木經匠家鏡」という。最も古い明の萬曆年間の版本『魯班経』は四冊本の一本として構成され、新刻『石函平沙

玉尺經全書真機』六卷などが収載され、北京の故宮博物館に所蔵されている。萬曆年間の版本は、日本の尊経閣文庫にも所蔵されている（子部、宋元明清百家類二三、術数之属、新鐫京板『工師雕斲正式魯班經匠家鏡』三卷）。

本稿はこの『魯班經』の訳注である。底本としては、新鐫京板『工師雕斲正式魯班木經匠家鏡』（二冊三卷、一～三卷の版心は『魯班經』三卷末に別に『秘訣仙機』とあり、刊行年の記載なし、線装本、東京都立中央図書館所蔵、資料名…『魯班木經匠家鏡』、請求記号…特七三四三）を用いた。刊行年は不明であるが、先の萬曆版本では「瓦將軍」の記述に「大明國」とあるが、この書では「大清國」と書き換えられているところから、清代の版であると推測される。

この版本は一部不鮮明な点もあり、『絵圖魯班經』（影印本、刊行年不明、台湾、竹林印書局版、一冊四卷）と校勘した。これは底本とほぼ同じ構成となっている。さらに、明の萬曆版本（故宮珍本叢刊・新鐫京版『工師雕斲正式魯班經匠家鏡』海南出版社、二〇〇三年）も参勘した。ただし、底本と萬曆版本では、相宅の図など記載に異なる点が多々みられるため、不明な点などを確認するだけに留めた。

『魯班經』の版本としては、他にも『絵圖魯班經』四冊四卷（表紙に丙寅年清秋月編繪、線装本）、清刊本の『工師雕斲正式魯班木經匠家鏡』（北京圖書館古籍珍本叢刊）四十七所収、書目文献出版社、ただし後半部が欠落）などがある。さらに、江戸時代のものとして定さ

れる写本（国立国会図書館所蔵）もあり、この書が日本においても、広く読まれていたことがわかる。

今回の訳注は、卷之一、冒頭の「魯班仙師源流」、ついで書の最後に記載された「靈驅解法洞明進言秘書」（『秘訣仙機』（版心）所収、底本の卷之三の後半部は、萬曆版本においては、四冊本の一本、『靈驅解法洞明眞言秘書』に収載）の記載から最後まで、そして卷之二に記載された「相宅図」（本書にはこの題名はない）と解説を対象とした。ただし、紙数の関係で、四十五までにとどめた。また、今回訳注した部分の多くは図と解説で構成されるため、便宜上、それらに番号とタイトルを附記した。なお、本稿で掲載した図版は、底本とした都立図書館所蔵本によるが、「相宅図」の十五、十七、三五、三六番の図は欠損部が多いため、『絵圖魯班經』丙寅年版、線装本の図（水野所蔵）を用いた。

また、これまで水野杏紀・平木康平は、明代の日用類書や風水書の訳注（『营造宅經』Ⅰ～Ⅲ、『陽宅十書』Ⅰ～Ⅲ（『人文学論集』第二十六～三十一集、大阪府立大学人文学会、二〇〇八～二〇一三年所収））を行ってきたが、これらは今回訳注する『魯班經』と多くの共通性がみられる。たとえば、居室にまつわる禁忌、建築に関する吉日選び、風水による居室の環境の吉凶判断などであるが、これらは工匠たちのあいだにおいても、重視される事項であったことがうかがえる。

## 一・魯班仙師源流（『魯班經』卷之一所収）

（原文）師諱班、姓公輸、字依智、魯之賢勝路東平村人也。其父

諱賢、母吳氏。師生於魯定公三年甲戌、五月初七日午時。是日、白鶴群集、異香滿室、經月弗散。人咸奇之。甫七歲嬉戲不學。父母

深以為憂。迨十五歲、忽幡然、從遊子夏之門人、端木起。不數月、遂妙理融通、度越時流。憤諸侯僭稱王號、因遊說列國。志在尊周、而計不行。迺歸而隱於泰山之南、小和山焉。晦迹幾載十三年、偶出而遇鮑老輩。促騰譙譚、竟受業其門。注意雕鏤・刻畫、欲令中華文物煥爾一新。故嘗語人曰、不規而圓、不矩而方、此乾坤自然之象也。規以為圓、矩以為方、實人官兩象之能也。矧吾之明、雖足以盡制作之神、亦安得必天下萬世咸能師心而如吾明耶。明不如吾、則吾之明窮而吾之技亦窮矣。爰是既竭目力、復繼之以規矩・準繩。俾公私欲經營宮室、駕造舟・車・輿、置設器皿、以前民用者、要不超吾一成之法、已試之方矣。然則師之緣物盡制、緣制盡神者。顧不良且鉅哉。而其淑配雲氏、又天授一段神巧、所制器物固難枚舉。第較之於師、殆有佳處。內外贊襄用、能享大名、而垂不朽耳。裔（子）是年躋四十、復隱於懸山。卒遭異人授秘訣。雲遊天下、白日飛昇。止留斧鋸、在白鹿仙巖。迄今古迹（如見）昭然。故戰國大義、贈為永成待詔義士。後三年、陳侯加贈智惠法師。歷漢、唐、宋、猶能顯足、

助國屢膺封號。明朝、永樂間、鼎規北京龍聖殿、役使萬匠、莫不震悚。賴師降灵指示、方獲洛（落）成。爰建廟祀之。扁曰、魯班門。封待詔輔國大師北成侯。春秋二祭、禮用太牢。今之工人、凡有祈禱、靡不隨叩、隨應。忱懸象著明、而萬古仰照者。

（訓説）師 諱は班、姓は公輸、字は依智、魯の賢勝路東平村の人なり。其の父 諱は賢、母は吳氏。師は魯の定公三年甲戌、五月初七日午の時に生まる。是の日、白鶴群集し、異香 室に滿ち、月を経るも散ぜず。人咸な之れを奇とす。甫め七歳にして嬉戲して學ばず。父母深く以て憂いと為す。十五歳に迨び、忽ち幡然として、子夏の門人、端木起に従い遊ぶ。數月ならずして、遂に妙理融通し、度は時流に越ゆ。諸侯の王號を僭稱するを憤り、因りて列國を遊説す。志は尊周に在らんも、而れども計 行われず。迺歸りて泰山の南、小和山に隱る。迹を晦ますこと幾ど十三年を載ね、偶出でて鮑老輩に遇う。膝を促めて譙譚し、竟に業を其の門に受く。意を雕鏤・刻畫に注ぎ、中華の文物をして煥爾として一新せしめんと欲す。故に嘗て人に語けて曰く、規せずして圓、矩せずして方なるは、此れ乾坤自然の象なり。規を以て圓を為り、矩を以て方を為るは、實に人官兩象の能なり。矧んや吾が明は、以て制作の神を盡くすに足ると雖も、亦た安ぞ必ずしも天下萬世は成な能く心を師として吾が明の如くなるを得んや。

明 吾に如かざれば、則ち吾が明 窮わりて、吾が技も亦た窮わらん。爰に是れ既に目力を竭くして、復た之れに繼ぐに規矩・準繩を以てす。公私を俾て宮室を經營し、舟・車・輿を駕造し、器皿を置設せしめ、以て民の用に前むれば、要す吾が一成の法を超えざることを、已に之れが方を試みたり、と。然らば則ち師は物に縁りて制を盡くし、制に縁りて神を盡くす者なり。顧うに良く且つ鈍いならずや。而して其の淑配 雲氏は、又た一段の神巧を天授し、制する所の器物は固より枚擧し難し。之れを師に第較すれば、殆んど佳き處有り。内外 襄用を贅え、能く大名を享けて、不朽に垂るのみ。是に于いて年四十に躋り、復た懸山に隱る。卒に異人に遭いて、秘訣を授かる。天下に雲遊し、白日に飛昇す。斧鋸を止留して、白鹿の仙巖に在り。今に迄るまで古迹見るが如く昭然たり。故に戰國の大義(魏)、贈りて永成待詔義士と為す。後三年にして、陳侯 智恵法師を加贈す。漢、唐、宋を歴て、猶お能く蹤を蹟かにし、国を助けて屢 封號を膺く。明朝 永樂の間、北京龍聖殿を鼎創するに、役使萬匠、震悚せざる莫し。師の降灵指示に頼り、方に落成するを獲たり。爰に廟を建てて之れを祀る。扁に曰く、魯班門、と。待詔輔國大師北成侯に封ず。春秋の二祭には、禮として太牢を用う。今の工人、凡そ祈禱する有らば、叩に隨い、應に随わざる靡し。忱に懸象は著明にして、萬古仰ぎ照らす者なり。

(通釈) 師の名は班、姓は公輪、通称は依智、魯國の賢勝路東平村の人である。父の名は賢、母は呉氏という。師は魯の定公三年(前五〇七年、この年は甲午)五月七日午刻(午前十一〜午後一時頃)に誕生した。この日、白鶴が群れをなして集まり、かわつた香りが部屋に充滿し、何か月たつても消えなかつた。人はみなこれを不思議に思った。師は七歳になつても遊び戯れて学問をしなかつたので、父母はこのことを深く憂慮した。(けれども)十五歳になると、にわか(孔子の弟子の)子夏の門人である端木起にしたがひ、学問にうちこんだ。数か月もしないうちに、奥深い道理に通達した。その水準は時流を超えるものであつた。(師は)諸侯が身分をわきまえず、王号を称することに憤つた。それで列国を遊説した。その志は周の王室を尊崇するところにあつた。けれども、その計画は実現しなかつた。それで(魯國に)帰り、泰山の南の小和山に隱遁した。世を逃れて姿をくらましてから十三年ほどして、たまたま外出したときに、鮑老輩に出会つた。膝をつきあわせてじっくり話をして、ついにその門下に入り、学業を授かつた。彫る・ちりばめる・刻む・描く(といった工匠の技巧)に心血を注ぎ、中華の文物をすつかりと一新させようとした。ゆえに(師は)かつて人々に語つてこつた。「コンパスを用いなくても円形であり、定規を用いなくても方形であるのは天地自然の作り出す形である。コンパスを用いて円をつくり、定規を用いて方形をつくるのは、まことに人間の能

力が作り出す二つの形である。いうまでもなく、わたしの知恵であれば、製作の神技を尽くすことはできるが、天下の末代の人々がみな自分の心のままに仕事をして、わたしをこえることなどできようか。もし人々の知恵がわたしの知恵に及ばなければ、わたしの知恵は途絶え、わたしの技も途絶えてしまうであろう。そこでまずできる限り目測して、さらにコンパス・定規・水準器・墨縄などの道具を使えば、公私の工匠たちが宮殿や家屋を造営し、舟・車・輿こしなどの乗り物を建造し、生活の道具をこしらえ、人々の日常の用に役立たせることができる。そうすれば、かならずわたしと同じ出来ばえのものができるとは、すでにこの方法を試して確かめている。」こうして、師が物によつて制度を作りあげ、制度によつて神技をきわめたのである。思うにまことに立派で偉大なことではないか。そして、そのよき伴侶である雲氏がさらなる神技を天より授かり、器物を製作したが、その数は枚挙にいとまがない。それらを師の製作したもの比べてみると、ほとんど遜色がないほどすぐれている。内外の人々がその使い勝手の良さをほめたたえ、後世に不朽の名声を獲得している。こうして（師は）四十歳になると、懸山に隠棲した。ぱったりと異才の人に遭遇したので、秘訣を授けた。（そうすると師は）天空を雲遊し、白昼に天に昇って行つた。自分の斧と鋸のこぎを残しておいたが、それは白鹿仙岩にある。今日にいたるまで、その古跡は往時のまま、まの当たりに見ることができ。春秋戦国時

代の大国、魏は（師に）「永成待詔義士」の称号を贈った。その三年後、陳候はそれに加えて「智恵法師」の称号を贈った。漢から唐、宋の時代を経て、なおその功績を顕彰し、国家を助けたとして、しばしば封号を授与された。明朝の永楽年間（一四〇三～一四二五年）、北京の龍聖殿を築造する際には、その役目にあつた多くの工匠たちでふるえおそれない者はいなかった。（そこで皇帝は）師の威力に頼り、その霊を降して指示を仰ぎ、それによつてようやく落成にこぎつけることができたのである。これにより、（師の）靈廟を建立して祀つたが、その扁額に「魯班門」と記し、「待詔輔国太師北成候」の封号を授けた。春と秋の祭祀には、牛・羊・豚を供える太牢の儀礼を用いた。およそ今日の工人たちで（師に）祈請するならば、（それが）聞き届けてもらえないことはない。（師の威光は）まことに靈驗あらたかで、永遠に仰ぎ観る、かがやける存在である。

## 二、靈驅解法洞明真言秘書（『秘訣仙機』所収）

（原文） 魔者、必須有解。前魔禳之書、皆本上（土木）工師邪術。

蓋邪者何能勝正。是書所載諸法、皆句句真言。灵符妙訣、學者、觀者、勿得汚手開展。各宜敬之。凡有一切動作、起造完日、解禳之後、則土木之魔無益矣。如居舊室、或買者、賃者、家宅累見凶事、或病、或口舌、或爭訟。家中不和睦。夢魘叫、見神、遇鬼、傷害人口。主（生）意淡薄、時常火發、頻賊、偷盜、飛來等禍。敗家喪命之類、並皆可禳。能轉禍為福、首（百）難無侵、則永遠安泰矣。

因累試累驗特此抄刊。

（訓読） 魔は、必ず須く解有るべし。前の魔禳の書は、皆土木の工師の邪術なり。蓋し邪なる者は何ぞ能く正に勝ん。是の書に載する所の諸法は、皆句句真言なり。灵符の妙訣は、學ぶ者、觀る者、汚なき手もて開展するを得る勿れ。各宜しく之れを敬うべし。凡そ一切の動作、起造の完る日、禳解有るの後なれば、則ち土木の魔は益無し。如し舊室に居らば、或いは買う者賃する者は、家宅は累りに凶事、或いは病、或いは口舌、或いは争訟を見る。家中和睦せず。夢魘は叫び、神を見、鬼に遭い、人口を傷害す。生意は淡薄にして、時として常に火發し、頻りに賊、偷盜、飛來等の禍あり。敗家喪命の類は、並びに皆禳うべし。能く禍を轉じて福と為し、百難侵す無ければ、則ち

永遠に安泰なり。

累試累驗に因て特に此の抄刊す。

（通釈） お祓い（厭祓）は、かならず災厄を解消するものでなくてはならない。従来のお祓いの書は、みな土木工事の工匠の邪術である。思うに邪術では正しいお祓いなどできないであろう。この書に記載した諸々の方法は、その一句一句すべて真実の言葉である。靈符に示された秘訣は、（これを）学ぶ者や見る者は汚い手で書を開きめくつてはいけない。おのおのこれを敬わねばならない。およそ一切の作業や工事が完了した日や、禳解の祓いを行った後であれば、土木のお祓いの効果はない。もし古い家屋に住むと、（それを）買った場合も賃借した場合も、その家はしきりに凶事や病氣、口論、もめ事に出会う。家中は和睦せず、夢魘は叫び、鬼神に遭遇し、家人に傷害をもたらす。（そうすると、）家人は生きる意欲が薄れるし、日常的に火災が発生し、しきりに殺傷や盗賊、災厄の飛來が発生する禍いが起こる。家が破滅し、命を失うようなことがらは、すべて皆はらわねばならない。よく禍いを転じて福となし、あらゆる災難に侵される心配がなければ、（その家は）永遠に安泰である。

繰り返し繰り返し試験をした結果、（間違いがないので）特にこの書を刊行する。



## 工完禳解咒

(原文) 工完禳解咒 咒曰、

五行五土相剋相生。木能剋土、土速通形。木出山林、秀金剋神。木精急退、免得天噴。工師假術、即化微塵。一切魔鬼、快出戸庭。掃盡妖氛、五雷發聲。柳枝一酒、火盜清寧。一切魔物、不得番(翻)身。工師哩(俚)語、貶人八冥。吾本天令、永保家庭、急急如老君律令。

(訓読) 工完禳解咒 咒に曰く、

五行五土には相剋と相生あり。木は能く土を剋し、土は速やかに形を通す。木は山林に出づるも、秀金は神を剋す。木の精は急に退き、天の噴りを得るを免る。工師は術を假らば、即ち微塵に化す。一切の魔鬼、快やかに戸庭より出だす。妖氣を掃い盡し、五雷 聲を發す。柳枝と一酒もて、火盜清寧たり。一切の魔物、身を翻すを得ず。工師の俚語に、人を陰冥に貶すも、吾は天令に本づき、永く家庭を保ち、急急に老君の律令の如くせん、と。

(通釈) 工完禳解咒 咒していう、

「五行五土には相剋と相生とがある。木はよく土を剋し、土は速くに形をかえる。木は山林に生えるが、秀金は神(木)を剋す。木の精は速やかに退くことで、天の怒りを免れる。工師は技術を用い、木を微塵に変化させる。(こうして)一切の魔鬼をすみやかに門戸の外

に追い出す。妖氣をはいつくし、五つの雷が轟音を發す。柳の枝と一杯の酒で、火災や盜賊の災禍を祓い鎮める。一切の魔物は身動きもできなくなる。工師の民間のいい伝えにこうある。人を陰の冥界におとしれようともし、われは天の命令にしたがい、永く家庭の平安を保ち、かしこみかしこみ老君の律令のままにせん。」

※つぎにあげる文は底本にはないが、明の萬曆版本にある。また、国立国会図書館本(写本)にもあり、校勘して記載した。

(原文) 唐李淳風代人擇日。其家造屋、淳風與之擇日。乃十惡大敗日、言稱今日乃上吉也。遂與其畫、此對貼于柱。其日、袁天罡、同唐太宗、來訪李淳風。偶見其立柱上梁。天罡笑曰、天下術士亂為也。太宗曰、何也。天罡曰、今日乃十惡日也。太宗曰、可問誰撰之日。遂問之。其家對曰、淳風也。天罡曰、今在何處。其家遂答曰、在右左寺山門口卜數。天罡欲行。其家留之、待以盛酒。不數盃遂辭而行。天罡、與太宗曰、臣、聞淳風高士、今虛傳也。太宗曰、可去問其數、看其知我爾乎。太宗未至寺。天罡先行見淳風曰、知我乎。曰、知也。今日左輔臨寺是君也。紫微至寺、差一時。然卦屬乾、二爻見龍在田、乃君至也。天罡曰、今知吾來。是真乃袁天罡。前村上梁、擇日是爾否。曰、然。天罡曰、今日乃十惡大敗日、何不識也。曰、今日紫微臨吉地、



諸凶神皆避也。天罡曰、紫微在于何所。曰、将及至寺也。方説完、太宗駕至入寺、淳風拜伏于地。太宗問其詳、天罡對、以立柱喜逢黃道日、上梁正遇紫微星之説。一一講明太宗。遂扶起而還。遂擢為軍師。今人家貼此、是此故事也。

(訓説) 唐の李淳風は人に代わりて日を擇ぶ。其の家屋を造るに、淳風之れが輿に日を擇ぶ。乃ち十惡大敗日なるも、言いて今日は乃ち上吉と稱す。遂に其の書を與えて、此の對を柱に貼らしむ。其の日、袁天罡、唐の太宗とともに、李淳風を來訪す。偶、其の立柱の上梁を見る。天罡笑いて曰く、天下の術士、亂りに為す、と。太宗曰く、何ぞや、と。天罡曰く、今日は乃ち十惡日なり、と。太宗曰く、誰か之れが日を擇べるかを問うべし、と。遂に之れを問う。其の家對えて曰く、淳風なり、と。天罡曰く、今何處にか在る、と。其の家遂に答えて曰く、右左の寺の山門の口に在りて數を下す、と。天罡行かんと欲す。其の家、之れを留め、待するに盛酒を以てす。數杯ならずして遂に辭して行く。天罡、太宗に與して曰く、臣、淳風は高士なりと聞くも、今、虚傳なり、と。太宗曰く、去りて其の數を問いて、其の我と爾を知るやを看る可し、と。太宗未だ寺に至らず。天罡先に淳風を見て曰く、我を知るか、と。曰く、知れり。今日左輔して寺に臨むは是れ君なり。紫微、寺に至る、差うこと一時。然らば卦

は乾に屬し、二爻は見龍、田に在り、乃ち君至るなり、と。天罡曰く、今吾れの來たるを知る。是れ真に乃ち袁天罡なり。前村の上梁、日を撰ぶは是れ爾なるや否、と。曰く、然り、と。天罡曰く、今日は乃ち十惡大敗日なり、何ぞ識らざる、と。曰く、今日紫微、吉地に臨む、諸もの凶神、背避す、と。天罡曰く、紫微は何れの所にか在る、と。曰く、将に及びて寺に至らんとす、と。説き完るに方りて、太宗の駕、至りて寺に入り、淳風は地に拜伏す。太宗其の詳を問う。天罡は對するに、立柱は黃道に逢うを喜び、上梁、正に紫微星に遇うの説を以てす。一一太宗に講明す。遂に扶起して還る。遂に擢きて軍師と為す。今の人家、此れを貼るは、是れ此の故事なり。

(註)・太宗(五九八―六四九年)は唐の第二代皇帝。高祖李淵の第二子、李世民。貞觀の治で知られる。

・李淳風(六〇二―六七〇年)は唐の天文学者、数学者。「麟德曆」編纂。

・袁天罡(生没年不明)は唐の天文学者、占術家。

※この話は天文学者、李淳風、袁天罡に仮託してつくられたものであろう。「上梁」は、日本でいう「棟上げ」にあたる。

(通釈) 唐の李淳風は人に代わって(造屋などの)吉日を選んで、ある人が家屋を造営することになったので、李淳風はその人のため

に日を選んだ。その日はすなわち十悪大敗日（という凶日）であったが、李淳風はその日を上吉だと称した。そして書きものを与えて、その対聯を（左右の）柱に貼らせた。その日、袁天罡は唐の（皇帝）太宗とともに、李淳風のもとを来訪したが、たまたまその上梁（棟上げ）の立柱をみた。天罡は笑っていた。「天下の占い師も血迷ったか。」太宗はいった。「何ぞや。」天罡はいった。「今日はこともあろうに十悪日（凶日）です。」太宗はいった。「これは誰が選んだ日かを聞いてみよ。」そこで、天罡はその家の主人に尋ねた。その家の主人がこたえていった。「李淳風です。」天罡はいった。「彼は今どこにいるのか。」その家の主人はこたえていった。「あちらの寺の山門の入り口で占いをしております。」天罡が行こうとすると、その家の主人は引き留めて、酒を出して接待をした。（天罡は）数杯を傾けるとすぐ辞去した。天罡は太宗にむかつていった。「私は、李淳風は高士と聞いておりましたが、今それはいつわりだと知りました。」太宗はいった。「彼のもとに行つて、その占いがどのようなかを尋ねよ。わたしとそなたが誰かを知っているか、さぐつてこい。」太宗が寺に到着する前に、天罡はそれより先に李淳風に会つて言つた。「私が誰か知っているか。」李淳風はいった。「存じ上げております。今日（紫微を）補佐して寺に来られたお方です。紫微（帝）はやや遅れて寺に来られます。ですから、占つた卦は乾（乾为天）卦の二爻「見龍在田」と出ました。やがて帝がここに来られま

す。」天罡はいった。「今に私がまぎれもなく袁天罡であることがわかるであろう。寺の前の村の上梁（棟上げ）の日を選んだのはそなたか。」（李淳風が）いった。「そうであります。」天罡はいった。「今日は十悪大敗日である。それを知らぬともいふのか。」（李淳風が）いった。「今日は紫微（帝）が吉地に臨まれる日でありますので、諸々の凶神が避けて逃げております。」天罡はいった。「紫微はどこにいるのか。」（李淳風は）いった。「いままさに寺においでになります。」その話がちょうど終わったときに、太宗の車駕が寺に入つてきた。李淳風は地面にひれ伏した。太宗はこの詳細を問いかけた。天罡は太宗におこたえて、「立柱喜逢黄道日、上梁正遇紫微星」（立柱は黄道の日に出遇うのがめでたく、上梁（棟上げ）は正に紫微星に出遇うのがめでたい）との説をひとつひとつ説明した。（その話に感心した）太宗はすぐ李淳風をたすけ起こして連れ帰り、そこで軍師に抜擢した。今の人家において（上梁（棟上げ）のときにこの対聯を貼るのは、この故事によるものである。

## 禳解類

(一) 瓦將軍 (原文) 凡置瓦將軍者、皆因对面或有獸頭、屋脊、

墻頭、牌坊脊。隔屋見者、宜用瓦將軍。如近對者、用獸牌。每月、

擇神在日安位。日由天晴、安位者吉、如雨、不宜。若安位反凶。木

物不宜藏座下。將軍本屬土。木原剋土。故不可用安位。必先祭之、

用三牡、酒果、金錢、香、蠟燭類。

祝曰。

伏以、神本無形伏(狀)。莊嚴而成法相。師傅有教。待開光而

顯靈通(即用墨點服□(眼睛))。伏為南瞻部州大清國、某省、

某縣、某都、某圖住屋、奉神信士某人。今因對門遠見屋脊、或

墻頭相冲、特請九獸總管、瓦將軍之神、供于屋頂。凡有冲犯、

迄(乞)神速遣、永鎮家庭、平安如意。全賴威風、凶神速避、

吉神降臨、二六時中、全吻神庇、祭祀以完、請登寶位。

祝畢、以將軍向前安坐(上梯)。不可朝自己屋。凡工人可在將軍後。

切不可在將軍前。恐有傷犯休教。主人对面伸者、宜旁側立者、吉。

(訓說) 凡そ瓦將軍を置く者は、皆対面に獸頭、屋脊、墻頭、牌

坊の脊有るに因る。屋を隔てて見ゆる者は、宜しく瓦將軍を用うべし。

近く對するが如き者は、獸牌を用う。毎月、神の日の安位に在るを擇ぶ。

日は天の晴れるに由り、位に安んずるは吉。如し雨ならば、宜しからず。

若し位に安んずれば反つて凶。木物は座下に藏するに宜しからず。將軍

は本土に屬す。木は原より土に剋つ。故に位に安んずるに用うべから

ず。必ず先ず之を祭るに、三牡、酒果、金錢、香、蠟燭の類を用う。

祝して曰う。

伏して以えらく、神は本より形状無し。莊嚴にして法相を成す。

師傅、教有り。光を開くを待ちて靈通顯る。

(即ち墨を用いて眼睛を點す)。伏して南瞻部

州大清國、某省、某縣、某都、某圖の住屋、神

を奉ずる信士某人と為す。今、門に對して遠く

屋脊、或いは墻頭の相冲するを見るに因り、特

に九獸の總管、瓦將軍の神を請ひ、屋頂に供う。

凡そ冲犯有らば、神速やかに遣わし、永く家

庭を鎮め、平安、意の如くなるを乞う。全く

威風に頼り、凶神は速やかに避け、吉神降臨し、

祝畢りて、將軍の面を以て前に向け梯に上る。自己の屋に朝う可

からず。凡そ工人は只だ將軍の後に在る可し。切に將軍の前に在る可

からず。休教を傷犯する有るを恐る。主人対面して伸ぶる者は、宜し

く旁側に立つれば、吉。

(註) 「大清國」、明の萬曆刊本は「大明國」に作る。



〔通釈〕 一般的に（家の屋根に）「瓦將軍」を設置するのは、みな（自分の家の）対面に（他人の家の）獸頭、屋脊（屋頂と両端の勾配）、牆（塀壁）の頭頂、牌坊（中国の伝統的な門）の脊があり、（自分の家に向つて冲する）場合である。家屋を隔てて見える場合は瓦將軍を用いるのがよく、近く（自分の家に向つて冲する）場合には「獸牌」を用いる。（設置は）毎月の位に安んじる（よき日）を選ぶ。晴れの天氣に安置すれば吉である。雨のときはよくない。もし（雨のときに）安置すれば、かえつて凶である。（「瓦將軍」を）木でつくり、座の下に収蔵するのはよくない。「瓦將軍」はもともと土に属するからである。木はもとより土に勝つ（木剋土）。ゆえに安置するのに木を用いてはならない。必ずまず「瓦將軍」を祭祀する場合、牛・羊・豚の三種のいけえ、酒果、金錢、御香、ろうそくの類を用いる。

〔「瓦將軍」を安置すること〕 祝していう。

伏して思うに、神はもともと形がなく、莊嚴にして法相をそなえておられます。師傅は教えをもつております。その光が開かれるのを待つて、靈験が顕われます。（つまり、墨を用いて「瓦將軍」の眼を開く）。伏して願います、南瞻部州大清国、某省、某縣、某都、某図の住屋、敬神の信者某人であります。今、（わが家の）門に對峙して遠く（他人の）家の屋脊（屋頂と両端の勾配）、あるいは牆（塀壁）の頭頂が（自分の家に）向かい冲するのをみて、

特に九獸の総監であられる「瓦將軍」に屋頂に坐したまうことを請いたてまつります。およそ（他家からの）対冲の犯があるならば、神よ、すみやかに（手下を）遣わし、永久にわが家を鎮め、望み通り平安がさかりますように。すべて威風にすぎり、凶神は速やかに避け、吉神は降臨し、いつなんどきも、神のご加護にあずかりますように。祭祀がおわれば、その宝位に登りたまわんことを願いたてまつります。

祭祀がおわつたならば、將軍を前向きにして梯はしをのぼる。自分の家のほうに向けてはならない。およそ工匠はただ將軍の後にいなければならぬ、けつして將軍の前にはいられない、とうとい導きを傷つけおcasすることを恐れるからである。主人（の家屋）が対面して伸びてきている場合は、（ずらして）かたわらに立てれば、吉である。

（二）泰山石敢當（図には太山石敢當とある）

〔図の解説〕 高四尺八寸、濶一尺二寸、厚四寸、埋入土八寸。（高さ四尺八寸、濶さ一尺二寸、厚さ四寸、土に埋入すること八寸。…高さ四尺八寸、広さ一尺二寸、厚さ四寸、土に八寸埋めこむ。）

〔原文〕 凡鑿石敢當、須擇冬至日後甲辰、丙辰、戊辰、庚辰、壬辰、甲寅、丙寅、戊寅、庚寅、壬寅、此十二日、乃龍虎日。用之吉。至除夜、用生肉三片祭之、新正寅時、立于門首。莫與外人見。凡有巷道來冲者、

用此石敢當。



(訓説) 凡そ石敢當を鑿つは、須らく冬至の日の後の甲辰、丙辰、戊辰、庚辰、壬辰、甲寅、丙寅、戊寅、庚寅、壬寅、此の十二日、乃ち龍虎の日を擇ぶべし。之れを用うれば吉。除夜に至れば、生肉三片を用いて之れを祭り、新正の寅の時、門首に立つ。外人と見る莫れ。凡そ巷道の來冲する者有らば、此の石敢當を用う。

(通釈) およそ「石敢當」をうがつて（設置工事を始めるのは）、冬至のあとの甲辰、丙辰、戊辰、庚辰、壬辰、甲寅、丙寅、戊寅、庚寅、壬寅、この十二（十）日、すなわち龍（辰）と虎（寅）の日を必ず選ぶ。この日を用いれば吉である。大晦日の夜になれば、生肉三片を用いてこれを祭り、新たな年の正月の寅刻（午前一時〜三時頃）に門首に立てるのである。その工事は外部の人に見せてはいけない。およそ小道が（自分の家のほうに）向つて冲する場合には、この「石敢當」を用いて（その災厄を）避ける。

### (三) 獸牌

(圖の解説) 上潤八寸、按八卦。下六寸四分、按六十四卦。高一尺二寸、按十二時。兩邊合廿四氣。（上は潤さ八寸、八卦を按ず。下は六寸

四分、六十四卦を按ず。高は一尺二寸、十二時を按ず。兩邊は合して廿四氣とす。…(獸牌は) 上部の幅は八寸、八卦を象る。下部の幅は六寸四分、六十四卦を象る。高さは一尺二寸、十二時を象る。兩邊の合わせた長さ(二尺四寸) は二十四節氣を象る。)(『絵図魯班経』による。)

(原文) 但有人家對近墻屋之脊、用此獸牌。釘于窓頂上、不可直釘檐下。則對不着對面之冲。釘者須要準對、不可歪斜釘。不可釘于獸面。若釘當中、反凶也。今有圖式。黑圈處釘釘之處也。取六寅日、寅時吉。忌未亥。生命。



(訓説) 但だ人家の墻屋の脊に對近する有らば、此の獸牌を用う。窓頂の上に釘するも、檐下に直釘するべからず。則ち對して對面の冲に着けず。釘は須らく

要らず對に準かにし、歪み斜めに釘すべからず。若し釘すること中に當たらば、反つて凶。今圖式有り。黑圈の處は釘を釘する處なり。六寅の日、寅の時を取れば吉。未亥を忌む。命を生ず。(通釈) ただ他人の家の屋脊(屋頂と両端の勾配)が自分の家に接近して對峙する場合だけは、この「獸牌」を用いて(邪を避ける)。窓の頭頂に釘を打つ場合、(窓の上の)のきやひさしの下に、直接釘を打つてはならない。すなわち、(他人の家の屋脊が)對面して沖しているほうにまっすぐ向けて設置しない。釘を打つときは必ず水平に打ち、

ゆがめたり、ななめに打つてはならない。獸の顔面に釘を打つてはならない。もし釘が顔のなかにあたっているならば、かえつて凶である。ここに図式がある。この黒い丸いところが釘を打つ部分である。六寅の日と寅刻（午前三時～五時頃）に釘を打てば吉。未と申の日を忌む。命を生むからである。

(四) 天官賜福 (原文) 此板釘他人屋脊上、或牆上。須要與他家屋主人說明。要他家主人書、不可自書。若自寫、反不吉。此板因不釘獸牌、或對門相好親友、恐他人不喜之設。故釘此、以兩吉也。和睦、鄉里之用。



(訓説) 此の板は他人の屋脊の上、或いは牆上に釘す。須らく要す他の家屋の主人の與に説明すべし。他家の主人寫し、自ら書くべからず。若し自ら寫せば、反つて吉ならず。此の板は獸牌を釘せず、或いは門に對して相い好む親しき友あり、他人の喜ばざるの設を恐るるに因ればなり。故より此れを釘すれば、以て兩つながら吉なり。郷里に和睦するの用あり。

(通釈) この板（「天官賜福」）は他人の（家の）屋脊（屋頂と両端の勾配）の上、あるいは壁（扉壁）の上に釘を打つて（設置する）。かならず他人の家屋の主人に對して、説明することが必要である。他家

の主人が書寫し、自分が書寫してはならない。もし自分が書寫すれば、かえつて不吉である。この板は、「獸牌」を設置せず、あるいは向かいの隣人とは親しい友人であつたり、相手が（「獸牌」を）設置するのを心よく思わないことを恐れる場合に用いる。もとよりこれを設置したならば、自分と相手の双方とも吉である。（こうして）近隣との和睦の用途とするのである。

(五) 一善 (原文) 擇四月初八日、用佛馬、淨水、化紙畢。辰時釘。釘時、須要人替（看）待。傍人有識此者、借其言曰、一善能消百惡。若傍人不說、則先使親友來說。釘此一善、須要現眼處。



(訓説) 四月初八日を選び、佛馬、淨水、化紙を用いて畢る。辰の時に釘す。釘する時、須らく要す人看待すべし。傍人此れを識る者有らば、其の言を借りて曰く、一善能く百惡を消す、と。若し傍人説かざれば、則ち先ず親友をして來たり説かしむ。此の一善を釘するは、須らく要す眼にする處に現わすべし。

(通釈) 四月八日（釈迦の生誕日）を選び、仏馬、淨水、化紙を準備しておく。辰の刻に釘を打つ。釘を打つ時、かならず人がみているのを待つて行ふ必要がある。傍らに「一善」に関することを知っている人

がれば、その人の口を借りて、「一善は能くあらゆる悪を消す」といつてもらおう。もし傍らの人が知らない場合は、先に親しい友人を呼んでいつてもらおう。この「一善」のお札を打つ場合、かならず人の目にも見えるところに設置する必要がある。

(六) 姜太公在此

(原文) 但一應興工、破土、起造、修理、皆通用。寫姜太公符者、不宜用白紙。用□□(黄紙)。



(訓読) 但だ一たび興工、破土、起造、修理に應ずるに、皆通用す。姜太公の符を寫す者は、宜しく白紙を用うべからず。黄紙を用う。

(註) 姜太公は古代、西周の軍師であった太公望呂尚のこと。姓は姜、氏は魯、字は子牙。斉国の始祖。

(通釈) ただひとたび工事をおこしたり、土をほつたり、造営を始めて、修理をしたりするときは、いずれも「姜太公在此」の護符を用いる。姜太公の護符を書写する場合、白紙を用いてはならない。黄紙を用いる。

(七) 倒鏡(又白虎鏡)

(原文) 此鏡鑄成如等盤様。四圍高、中間陷。不宜太深四(凹)。中磨亮、不類人與物照之、皆倒也。凡有



廳屋、宮室、高樓、殿寺、庵觀屋脊及旗竿相沖、用此鏡鎮之。

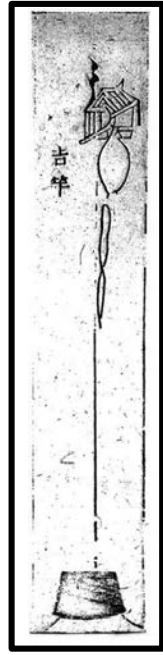
(訓読) 此の鏡の鑄成は等盤の様の如し。四圍高く、中間陷す。宜しく太だ深く凹ますべからず。中は磨亮し、人と物とを類たず之れを照して、皆な倒にす。凡そ廳屋、宮室、高樓、殿寺、庵觀の屋脊及び旗竿相沖する有らば、此の鏡を用い之れを鎮む。

(通釈) この鏡の鑄造は、等盤の様式と同じである。周囲が高く、真ん中がへこんでいる。あまり深くへこんでいるのはよくない。鏡の中心は明るく磨き、人と物とを分かつぞらして、みなさかさまに映る。およそ(他の)庁屋、宮室、高樓、殿寺、庵觀の屋脊(屋頂と両端の勾配)、旗竿などが(自分の家に)向つて沖する場合、この鏡を用いてこの邪を鎮める。

(八) 吉竿

(原文) 吉竿用長木。架上用披木板。如雨落水、一般名曰避雨。中用轉肘。好扯燈籠、燈籠上寫平安二字。避雨中用一板上寫紫微垣三字、像神位一般。供在避雨中。朝對沖處。凡有大樹、燈竿、城樓、寶塔、月臺、更樓、敵樓、官廳、官堂沖者、並皆用之。若人家前高低者、亦用。此不宜太高。立于後門、或後□□(天井)中。若後邊有山高、墻高、他家屋高、亦用此立於前天井內門前。





(訓読) 吉竿は長木を用う。架上に披水板を用う。雨の如く水を落とすを、一般に名づけて避雨と曰う。中は轉肘を用い、好く燈籠を扯る。燈籠の上に平安の二字を寫す。雨の中るを避くるに一板を用う。上に紫薇垣の三字を寫し、像神の位と一般なり。供えは避雨に在り。対沖の處に朝わす。凡そ大樹、燈竿、城樓、寶塔、月臺、更樓、敵樓、官廳、官堂の冲する者有らば、並びに皆之れを用う。若し人家前高く後低ければ、亦た用う。此れただ高きは宜しからず。後ろの門、或いは後ろの天井の中に立つ。若し後邊に山の高き、墻の高き、他の家屋の高き有らば、亦た此れを用いて前の天井内の門前に立つ。

(通釈) 「吉竿」は長い材を用いる。上部の台には水を避ける板を用いる。(のき先から落ちる) 雨のように水(滴)を落とす場合は、名づけて「避雨」という。中心に滑車を用い、燈籠をひっぱりあげることでできる。燈籠の上には「平安」の二字を書写する。雨があたるとを避けるために、一枚の板を用いる。上には「紫薇垣」の三字を書き、神像の扱いと同じにする。供物は「避雨」の中に置く。自分の家に向って冲するほうに置く。およそ大樹、燈竿、敵樓、寶塔、月台、更樓、

敵樓、庁堂、官堂などが、(自分の家に) 向かい冲する場合には、みなこの「吉竿」を用いる。もし(自分の)家の前が高く後ろが低ければ、またこれを用いる。これは高過ぎるのはよくない。後ろの門、あるいは後ろの庭のなかに立てる。もし家の後ろの山が高かったり、塀壁が高かったり、他人の家屋が高い場合、またこれを(自分の家の)前庭内の門前に立てる。

### (九) (黄) 飛虎將軍

(原文) 飛虎將軍或紙畫、或板上畫。凡有人家飛檐横冲者、用此。横冲屋脊等項、亦用此鎮之。見有人家安酒瓶者、亦同用小三白酒。内藏五穀。太平錢一文抑(研)成一塊、如品字樣。



(訓読) 飛虎將軍は或いは紙に畫き、或いは板上に畫く。凡そ人家の飛簷の横冲する者有らば、此れを用う。屋脊の等項に横冲すれば、亦た此れを用いて之れを鎮む。人家酒瓶を安んずる者有るを見れば、亦た同じく小さき三つの白酒を用う。内に五穀を藏す。太平錢一文をば一塊に研成し、品字の様の如くす。

(通釈) 「黄」飛虎將軍」は、紙の上や板の上に書写する。およそ他人の家ののきやひさしの(とがった部分が自分の家に) 向かい横に冲する場合は、この(黄飛虎將軍の)符を使用する。(他人の家の)屋脊(屋

頂と両端の勾配)などが(自分の家に)向かい横から沖する場合は、またこれを用いてその災厄を鎮める。他人の家で酒瓶を安置して災厄を鎮めるのをみた場合は、また同じように小さい、三つの白酒の瓶を用い、なかに五穀を入れ、太平銭一文を用いてひとかたまりにし、品の字のかたちに(並べて対抗)する。

### (十) 山海鎮

(原文) 山海鎮如不畫者、只寫山海鎮。如可畫之猶佳。凡有巷道、門路、橋亭、峰土堆、鎗柱、船埠、豆蓬柱等項通用。



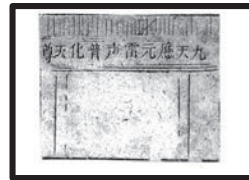
(訓読) 山海鎮は如し畫かざれば、只だ山海鎮と寫す。如し之れを畫くべくくんば猶お佳し。凡そ巷道、門路、橋亭、峰土堆、鎗柱、船埠、豆蓬柱等の項有らば通用す。

(通釈) 山海鎮(の画を)描くことができな場合は、ただ「山海鎮」(の字)を書写するだけでもよい。この画を描くことができれば、なおよろしい。およそ(自分の家の前に)小道、門にあたる路、橋亭、土堆(土の山)、槍のような柱、船の埠頭、豆蓬柱などがある場合、(この符は避邪に)通用する。

### (十二) 九天應元雷聲普化天尊

(原文) 凡有鐘樓、鼓樓、鉄馬梯、廻廊、秋遷架、牌樓上、麒麟、獅子開口者、及照牆、神閣、五聖堂

屋脊相沖等項、(並皆用貼于横)枋上。此事逢凶化吉。



(訓読) 凡そ鐘樓、鼓樓、鉄馬梯、廻廊、秋遷架、牌樓の上に麒麟、獅子の開口する、及び照牆、神閣、五聖堂の屋脊、相い沖する等の項有らば、並びに皆用いて横枋の上に貼る。此れ事に逢うも吉に化す。

(註) 「並皆用貼于横」の追加は明の萬曆刊本による。

(通釈) およそ鐘樓、鼓樓、鉄馬梯、廻廊、秋遷架、牌樓の上に麒麟、獅子があつて口を開けている、および照牆、神閣、五聖堂などの屋脊(屋頂と両端の勾配)が(自分の家に)向かい沖する場合には、みな(この符を)用いて横枋(横架材)の上に貼る。(すると)およそ物事が凶に逢つても、吉に変化させることができる。

### (十二) 槍籬

(原文) 凡有低屋脊、及矮牆頭沖者用。如己屋朝東、朝西、朝南者、恐日影、牆脊、屋脊影入門。故用槍籬以當其鋒。

(訓読) 凡そ低き屋脊、及び矮き牆頭の沖する有るは用う。如し己の屋、東に朝ひ、西に朝ひ、南に朝わば、日の影、牆脊、屋脊の影

門に入るを恐る。故に槍籬を用いて以て其の鋒に當つ。

(通釈) およそ(他人の家の) 低い屋脊(屋頂と両端の勾配)、および低い牆(塼壁)の頭頂が(自分の家に) 向かい沖する場合には、槍籬(尖った竹を用いた垣根)を用いる。自分の家屋が東、西、南に向いている場合は、



(他人の家の) 日の影や牆(塼壁)の頂き、屋脊(屋頂と両端の勾配)の影が(自分の家の) 門に入ることを恐れる。だから槍籬を用いて、そのきつさきに對抗するのである。

### 魯班秘書

(原文) 凡匠人在無人處、莫與四眼見。自己閉目展開、一見者使用。

(訓読) 凡そ匠人は無人の處に在り、四眼と見る莫かれ。自己のみ目を閉じて展開し、一見すれば便ち用う。

(通釈) およそ工匠は(この秘書を見るときは) 人のいないところにて、二人でみてはいけない。自分ひとりて眼を閉じて(秘書を) 開き、一見したらすぐに使用する。

(一) 桂葉 (原文) 桂葉藏於斗中、主發科甲。



(訓読) 桂葉 斗中に藏せば、科甲を發するを主る。

(通釈) 桂の葉を斗のなかに收藏すれば、(その家人が) 科擧に登第できる効果がある。

(二) 船 (原文) 船亦藏於斗中、可用船頭朝内、主進財。不可朝外。朝外、主退財。



(訓読) 船亦た斗中に藏し、船頭を用て内に向けしめべくんば、財を進むるを主る。外に朝けしむべからず。外に朝ければ、財を退くるを主る。

(通釈) 船はまた斗のなかに收藏して、船の頭を内に向けて置くとよい。(その家の) 発財に効果がある。(船の頭を) 外に向けて置いてはならない。散財のひきがねになる。

(三) 松 (原文) 不拘藏於某處、主主人壽長。



(訓読) 某處に藏するに拘わらず、主人の壽長なるを主とる。

(通釈) 松はどこに收藏しても、(その家の) 主人の長寿に効果がある。

## (四) 披頭五鬼

(原文) 此披頭五鬼藏中柱内、主死喪。

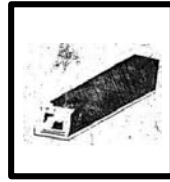
(訓読) 此の披頭五鬼をば中柱の内に藏せば、死喪を主とする。



(通釈) この披頭五鬼(の図)を中柱の内に収蔵すれば、(その家人に)死をもたらず。

## (五) 棺材

(原文) 一箇棺材死一口。若然、兩口主雙刑。大者其家傷大口、小者其家喪小丁。藏堂屋内枋内。



(訓読) 一箇の棺材は死するもの一口。若し然らば、兩口は雙刑を主とる。大なるは其の家の大口を傷り、小なるは其の家の小丁を喪す。堂屋の内、枋の内に藏す。

(通釈) 棺材をひとつ収蔵するならば、(その家の)ひとりが死ぬ。

そうだとすると、棺材が二つあると、二つの災いをひき起こす。大きい棺材はその家の年長者を死なせ、小さい棺材はその家の若者を死なせ。堂屋の枋(横架材)の内に収蔵する(と、そうなる)。

## (六) 黒日

(原文) 黒日藏家不吉昌。昏昏悶悶過時光、作事却如雲蔽日。年年疾病不離床。藏人門上枋内。

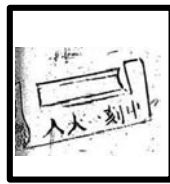


(訓読) 黒日 家に藏するは吉昌ならず。昏昏悶悶として時光を過し、事を作すに却つて雲日を蔽うが如し。年年疾病ありて床を離れず。人の門上の枋内に藏す。

(通釈) 黒色の日を(描いた画を)家に収蔵するのは吉昌ではない。(そうすると、その家人は)ほんやりもやもやして時間を過ごし、仕事をしてもかえって雲が日をおおうように陽の目をみない。毎年疾病にかかり、寢床から離れることができない。家の門上の枋(横架材)にそれを収蔵する(と、そうなる)。

## (七) 木人

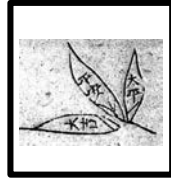
(原文) 鉄鎖冲闌(中間)藏木人、上描五彩像人形、其家一載死五口。三年五載絶人丁。深藏井底或藏牆内。



(訓読) 鉄鎖の中間に木人を藏し、上に五彩の像人の形を描かば、其の家は一載に死するもの五口。三年五載にして人丁を絶つ。深く井底に藏す、或いは牆内に藏す。

(通釈) 鉄の錠の中に木人をつくり、その上に五色で人の形に似せた姿を描くと、その家は一年で五人が死ぬ。三年五年のうちに家人を絶やす。井戸の底に深く収蔵するか、あるいは壁(塀壁)の内にそれを収蔵する(と、そうなる)。

(八) 竹葉



(原文) 竹葉青青三片連、上書大吉大平安。綵(深)

藏高頂椽梁上、人口平安永吉祥。藏釘椽屋脊

下金(梁) 柱上。

(訓読) 竹葉の青青として三片連なるに、大吉

大平安と上書す。深く高頂の椽梁の上に藏せば、

人口平安にして永く吉祥たり。椽に釘して屋脊の下の梁柱の上に藏す。

(通釈) 青々とした三片が連なる竹の葉の上に、大吉大平安と書く。

(それを) 奥深く、高い頂きにある椽梁(たる木)の上に収蔵しておくこと、

(その家の) 住人は平安で永く吉祥がもたらされる。椽(たる木)に

釘を打ち、屋脊(屋頂と両端の勾配)の下の梁柱の上に収蔵する(と、

そうなる)。

(九) 紗帽・靴・帯



(原文) 梁畫紗帽、檻畫靴、枋中畫帶正相宜。

生子必登科甲第、翰林院内去編書。

(訓読) 梁には紗帽を畫き、檻には靴を畫き、

枋中には帯を畫かば、正に相宜し。生子は必

ず科甲の第に登り、翰林院の内にて書を編む。

(通釈) 梁にうすい絹の帽子を描き、手すりに靴を描き、枋(横架材)

に帯を描くと、まことによろしい。(その家で) 生れた子はかならず科

挙の試験に合格し、翰林院に入り、書を編纂するようになる。

(十) 墨浸



(原文) 門縫中間藏墨簽(浸)、代代賢能出方正。

不為書吏却丹青。積善人家主(生) 忠信。

(訓読) 門の縫中の間に墨浸を藏さば、代代

賢能出でて方正たり。書吏と為りて丹青を却け

ず。善を積む人家は忠信を生ず。

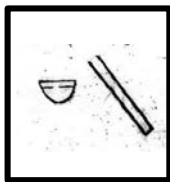
(通釈) 門の合わせ目の中に墨のしみたものを

収蔵しておくこと、(その家は) 代々賢く才能があり、品行方正な人物

を輩出する。書物を扱う官吏となつて書物から離れない。善行を積む

この家からは忠信の人物が生まれる。

(十一) 碗片・箸



(原文) 一塊碗片一根(枝) 筴、後代兒孫乞丐是。

衣粮口食常凍餓、賣了房屋住橋寺。藏門口、架梁内。

(訓読) 一塊の碗片と一枝の筴あらば、後代の

兒孫は乞丐なること、是れなり。衣粮口食常に

凍餓し、房屋を賣りて橋寺に住む。門口に藏し、

梁の内には架く。

(通釈) ひとつの欠けた碗と一組の箸(を収蔵すると)、(その家の)

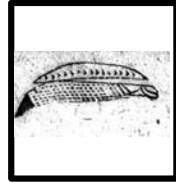
末代の子孫は乞食となることは間違いない。衣服や食糧はいつも欠乏し

て飢え凍え、家屋を売りはらい、橋や寺に住むことになる。それを門

口に藏し、梁に架けておく(と、そうなる)。

**(十二) 覆船**

**(原文)** 覆船藏在房北地、出外經營喪江内。兒女必然去投河、妻兒難逃產死厄。埋北首地中。

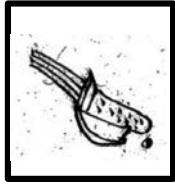


**(訓読)** 覆船 藏して房北の地に在らば、外に出でて經營し江内に喪す。兒女は必然として去りて河に投じ、妻兒は産死の厄を逃れ難し。北首の地中に埋む。

**(通釈)** 転覆した船（の画や像など）を房屋の北側の地に収蔵しておく、（その家人は）外に出て商いをして、大川で死ぬことになる。女兒は必ず（家を去つて）大川に身を投げ、妻は死産の厄をまぬがれがたい。（家の）北側の地に埋める（と、そうなる）。

**(十三) 一箇劍頭一係維**

**(原文)** 一箇劍頭一係維、塊藏地下、隨處行。夫妻父子長不睦。吊死繩頭有幾人。不理論于何處。『絵図魯班經』による。

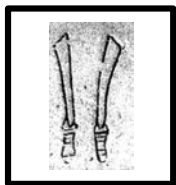


**(訓読)** 一箇の劍頭と一係の維、塊にして地下に藏さば隨處に行く。夫妻父子 長く睦まず。吊死の繩頭 幾人か有る。何處に埋むるかを論ぜず。

**(通釈)** 一振りの劍頭と一本のひも、それをかたまりにして地下に埋めると、（その家人は）あちらこちらに出かける。夫と妻、父と子は長く仲たがいない。縄で首をくくる人が何人いるのか。どこに埋めるか論じるまでもなく（そうなる）。

**(十四) 兩把刀**

**(原文)** 白紙畫成兩把刀、殺人放火逞英豪。殺傷人命遭牢獄、不免秋來刀下抛、藏門前白虎首枋内。



**(訓読)** 白紙 畫きて兩把の刀を成さば、人を殺し火を放ちて英豪を逞にす。人命を殺傷し牢獄に遭ひ、秋來たりて刀 下りて抛つを免れず。門前の白虎の首の枋内に藏す。

**(通釈)** 白い紙に二振りの刀を描くと、（その家人は）人を殺し火を放ち、英雄豪傑を気取つてほしいままに振る舞う。人の命を殺傷して、牢獄に入れられ、秋が到来すると刀で首を切り落とされることは必定である。門前の白虎の首あたりの枋（横架材）のところに収蔵する（と、そうなる）。

**(十五) 一人一馬一枝槍**

**(原文)** 一人一馬一枝槍、武職身榮大。吉昌。名聞天下虜威失（戎服）、不免將軍死戰場。



**(訓読)** 一人一馬一枝の槍は、武職は身榮えて大いに吉昌たり。名は天下に聞こえ虜戎は服するも、將軍の戰場に死するを免れず。

**(通釈)** 一人が一頭の馬に乗り一本の槍を持つ符（を収蔵すると）、（その家人は）武人となり、その身は榮達して大いに吉昌である。その名は天下に聞こえ、夷狄は服従するが、將軍と



して戦場で死ぬことは必定である。

(十六) 白虎

(原文) 白虎當堂坐正廳、主人口舌不離身。女人在家多疾厄、不傷小口只傷妻。藏梁楣内、頭向内凶。



(訓読)

白虎は堂 正廳に坐するに當たれば、主人は口舌 身を離れず。女人は家に在り疾厄多く、小口を傷らず只だ妻を傷る。梁楣の内に藏して、頭 内に向かわば凶。

(通釈)

白虎は堂の正庁(正式な客間)内に配置されていると、(その家の)主人は口論の争いからたえず逃れられない。その家の女性は家の中で疾病や災厄が多くふりかかり、家の若者を傷つけないが、ただ妻を傷つける。梁や楣の内に(白虎を)収めて、その頭が内に向いていると凶である。

(十七) 斗中米

(原文) 非(斗)中藏米家富足、必然富貴發榮(華)昌。千財萬貫家安為(穩)、米爛成倉衣滿箱。藏斗内。



(訓読)

斗中に米を藏せば家富足り、必然として富貴にして華昌を發す。千財萬貫の家は安穩たりて、米は倉に爛成し衣は箱に満つ。斗内に藏す。

(通釈) 斗の中に米を収めておくと、(その)家の富は充足する。かならず富貴になり榮華をきわめ繁昌する。幾千万の財を有する家は安穩であり、米は倉にあふれ、衣装は箱に満ちるようになる。斗(ます)の中に米を収めておく(と、そうなる)。

(十八) 一塊破瓦一斷鋸 (原文) 一塊破瓦一斷鋸、藏在梁頭合縫處、夫喪妻嫁子抛離、奴僕逃亡無處置。藏正梁合縫内。

(訓読)

一塊の破瓦と一斷の鋸、藏して梁頭の合縫する處に在らば、夫は喪し妻は嫁ぎ子は抛離し、奴僕は逃亡して處置無し。正梁の合縫内に藏す。



(通釈)

一枚の割れた瓦と一丁の折れた鋸を梁の頭部の結合したところに収蔵しておくと、(その家の)夫は死に、妻は再婚し、子供は投げ出され、奴僕は逃亡して、なすすべもない。正梁(大梁・主梁)の結合部に収蔵する(と、そうなる)。

(十九) 雙錢

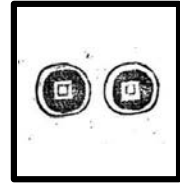
(原文) 雙錢正梁左右分、壽財福祿正豐盈。夫榮子貴妻封贈、代代兒孫挂緞衣。藏正梁兩頭。一頭須要覆放。

(訓読)

雙つの錢 正梁の左右に分かてば、壽財福祿 正に豊盈す。夫は榮え子は貴く妻は封贈せられ、代代 兒孫は緞衣を挂く。正梁



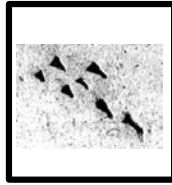
の兩頭に藏す。一頭は須らく覆い放つを要すべし。



(通釈) 二枚の銭を正梁(大梁、主梁)の左右にふり分けて置いておくと、(その家は)寿財・福・禄はまさに豊かに満ちる。(その家の)夫は繁栄し、子は高貴になり、妻は(そのお蔭で)位を贈られ、代々の子孫は高位の衣を身につける。正梁(大梁、主梁)の両側に銭を收藏するからである。片側の銭は必ずひっくり返さなければならぬ。

(二十一) 七箇釘 (原文) 七箇釘頭作一包、七口人丁永不抛、若

然添人與取媳、一得一失必難逃。藏柱内孔中。

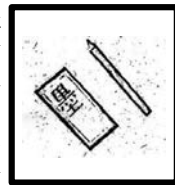


(訓読) 七箇の釘頭 一包を作さば、七口の人丁永く抛たず。若し然らば人に添うと媳を取ると、一得一失すること 必ず逃れ難し。柱内の孔中に藏す。

(通釈) 七個の釘をひと包みにしておくと、(その家の)七人はながらく見捨てられない。もしそうなれば人に添うか、息子に嫁をもらうか、ひとつを得ればひとつを失うことからかならず逃れることはできない。柱の内の穴のなかに收藏する(と、そうなる)。

(二十二) 一定好墨一枝筆 (原文) 一定好墨一枝筆、富貴榮華

金階立。必佐聖朝為宰臣。筆頭若蛙退官職。藏枋内。



(訓読) 一定の好墨と一枝の筆あらば、富貴榮華にして金階に立つ。必ず聖朝を佐けて宰臣と為る。筆頭の蛙の若きは官職を退く。枋内に藏す。(通釈) ひとつのよい墨と一本の筆(を收藏すれば)、(その家は)富貴榮華となり、(家人は)出世して玉階に立つ。かならず朝廷を輔佐して宰相となる。筆の頭が蛙のようになれば官職を退く。枋(横架材)のところに收藏する(と、そうなる)。

(二十二) 某符 (原文) 合木木中書此符、家中常見鬼妖魔。

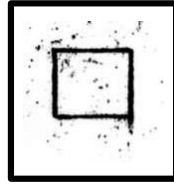
走石飛砂常作怪、妻女兒郎祛病多。将木上鑲縫中書之。



(訓読) 合木の木中に此の符を書かば、家中常に鬼妖魔を見る。走石飛砂 常に怪を作し、妻女兒郎は祛病多し。木上の鑲縫の中を将て之れを書く。

(通釈) つぎ合わせた木のなかにこの符を書写すると、(その)家のなかでは常に鬼魔、妖魔をみる。転がる石や飛ぶ砂が常に怪異をおこし、妻や女、子供は病に多くかかる。木の上の継ぎ目にこれを書写する(と、そうなる)。

(二十三) 口字 (原文) 朱雀前書多口舌、官非横禍相連涉。家財耗散損人丁、直待賣房絕得歇。寫大門上枋中。



(訓説) 朱雀の前に書かば、口舌多く、官非横禍 相い連渉す。家財は耗散し人丁を損ない、直だ房を賣りて絶えて歇くるを得るのみ。大門上の枋中に寫す。

(通釈) 朱雀(南)の前に(この符を)書写すれば、(その家は)口論がさかんにおこり、お上の咎めや不慮の災難がしきりにふりかかってくる。家財は消散し、家の住人をそこない、ただ家を売りはらつて家の断絶するばかりとなる。大門上の枋(横架材)に書写する(と、そうなる)。

(二十四) 囚字 (原文) 門檻縫中書斗内(一囚)、房若成時、禍上頭。天大官司監牢内、難出監中作死囚。藏門檻合縫中。



(訓説) 門檻の縫中に一囚を書かば、房もし成る時 禍い上頭す。天大官司監の牢内、監中を出づること難くして死囚と作る。門檻の合縫中に藏す。

(通釈) 門のかんぬきの継ぎ目に囚の字を書写すると、(その)房屋が完成する時、災禍がおこる。(家人は)天大官司監の牢獄に入れられ、

そのなかから出るとは困難で、獄中で死ぬことになる。門のかんぬきの継ぎ目に収蔵する(と、そうなる)。

(二十五) 牛骨 (原文) 房室中間藏牛骨、終朝辛苦忙碌碌。老來身死没棺材、後代兒孫壓肩多(肉)。埋屋中間。



(訓説) 房室の中間に牛骨を藏さば、終朝辛苦して忙しく碌碌たり。老い來たり身死するも棺材没く、後代の兒孫は肩肉を壓す。屋の中間に埋む。

(通釈) 房室(寢室など)のなかほどの(床下に)牛骨を埋めると、(その家人は)夜通し身体が辛くて、落ち着かず意識がもうろうとなる。老いばれて死んでも棺材もない。末代の子孫は肩の肉を傷めつぶすことになる。部屋のなかほどに埋める(と、そうなる)。

(二十六) 頭髮把刀



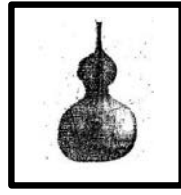
(原文) 頭髮中間囊把刀、兒孫落髮出家逃。有子無夫常不樂、鰥寡孤独不相饒。藏門檻下地中。(『繪図魯班経』による)。

(訓説) 頭髮の中間に把刀を囊めば、兒孫は髪を落とし家を出て逃ぐ。子有るも夫無くして常に樂しまず、鰥寡孤独にして、相い饒かならず。

門檻かどかみの下の地中に藏す。

(通釈) 頭髮のなかに小刀をつつむように刺すと、(その家の) 子孫は髪を落として出家して去る。子はあつても夫はおらず、常に楽しくない。独り者の孤独の身で、家は豊かではない。門のかんぬきの下の地中に收藏する(と、そうなる)。

(二十七) 葫蘆 (原文) 牆頭梁上畫葫蘆、九流三教用工夫、凡住人家皆異術、醫卜星相往來多。畫牆上畫梁合縫内。



(訓読) 牆頭梁上に葫蘆を畫かば、九流三教工夫を用う。凡そ住人の家に皆異術あり、醫卜星相往來多し。牆上に畫き梁の合縫の内いぼくせいまうに畫く。

(通釈) 牆(塀壁)の頭頂部や梁の上にひょうたんを描くと、(その家人は) 九流(諸子百家)や儒仏道の三教の学を研究するようになる。およそ(その家の)住人は皆異術をおさめ、医、卜筮、占星、相法の専門家たちがさかんに出入りするようになる。牆(塀壁)上に描いたり梁の継ぎ目に描いたりする(と、そうなる)。

### 魯班先師秘符 ※ただし底本にこの題名はない

(原文) 凡造房屋、木・石・泥水匠、作諸色人等、蠱毒魘魅、殃害主人。上梁之日、須用三牲福禮、橫扁一架。祭告諸神將、魯班先師。秘符一道念咒云、惡匠無知、蠱毒魘魅、自作自當、主人無傷。暗誦七遍。本匠遭殃、吾奉。

太上老君勅令、他作、吾無妨。百物化為吉祥。急急律令。即將連符焚於無人處、不可四眼見。取黃黑狗血、暗藏酒内。上梁時、將此酒連通匠頭三杯、餘者分飲衆匠。凡有魘魅、自受其殃、諸事符解。此符用硃砂書、符貼正梁上。

黑圈内寫本家名字、在内。寫完、以墨塗之。貼符用左手持之。貼時、莫許外人說閒話。貼畢下梯。方以青龍。和合淨茶(水)・米・食・化紙。即安家堂、聖象(衆聖)接土地、灶神居位。遂念安家堂真言曰、

天陽地陰、二氣化神。三光普照、吉曜臨門。華香散彩、天樂流音。迎請家堂、司命六神。萬年香火、永鎮家庭。諸邪莫入、水火難侵。門神戶尉、殺鬼誅精。神威廣大、正大光明。太乙勅命、久保私門。安神已畢、永遠大吉。

(訓読) 凡そ房屋を造るに、木・石・泥水の匠、諸色を作る人等、蠱毒魘魅もて、主人を殃害す。上梁の日、須らく三牲の福禮、横扁



と。暗誦すること七遍。本匠 殃いに遭わば、吾れ太上老君の勅令を奉ずれば、他作すも、吾を妨ぐる無し。百物は化して吉祥と為れ。急急律令と。即ち符を將て人無き處において焚き、四眼をして見しむべからず。黄黒の狗血を取り、暗に酒の内に藏す。上梁の時、此の酒を將て連なり遮いに匠頭は三杯、餘りは分けて衆匠に飲ましむ。凡そ魘魅をらば、自ら其の殃いを受くれば、諸事 符もて解す。

此の符は硃砂を用いて書き、符は正梁の上に貼る。

黒圈の内に、本家の名字は寫して、内に在り。寫し完らば、墨を以て之れを塗る。符を貼るに左手を用いて之れを持つ。貼る時は、外人の問話を説くを許す莫し。貼り畢れば梯を下る。方に青龍を以て、浄水・米・食・化紙を和合す。即ち家堂に安んじ、衆聖の土地、灶神を接して、位に居く。遂に家堂を安らかにする真言を念じて曰く、

天は陽 地は陰なり、二氣 神に化す。三光普く照らし、吉曜門に臨む。華香 散彩し、天樂 流音あり。家堂に迎請す、司命六神を。萬年の香火あり、永く家庭を鎮む。諸邪入る莫く、

の一架を用うべし。諸の神將、魯班先師に祭告す。秘符は一道に念咒して云く、悪匠は知る無く、蠱毒魘魅、自ら作り自ら當たるを。主人傷む無かれ、

水火侵し難し。門神 戸尉は、鬼を殺し精を誅す。神威は廣大にして、光明正大なり。太乙の勅命は、久しく私門を保つ。神を安んずること已に畢り、永遠に大吉なり。

(通釈) およそ家屋を造営するとき、木匠(大工)や石匠(石工)、

泥水匠(左官)やもろもろの工匠たちが、(故意に)蠱毒(毒物)や魘魅(魔物)をもつて(その家屋の)主人に災禍をもたらす(場合がある)。(それで家屋の)上梁(棟上げ)の日には、牛・羊・豚の三種のめでたい生贄の供物をささげ、(吉祥の字を書いた)横額一架をかける。もろもろの神將や魯班先師に祭の始まりを告げる。参列者は一緒に秘符を念呪するという。「不出來の工匠は気づかぬが、蠱毒魘魅の災厄は、おのずからおこりふりかかる。(この呪を唱えたからには)主人よ、心配は無用。」七回これを暗誦する。「この工匠たちが災厄に遭おうとも、太上老君の勅令を奉ずれば、魘魅などが悪事をはたらいても、われをさまたげることのないように。あらゆるものは(禍いを)転じて吉祥となれ。急急律令。」ただちにこの呪文を書いた符を人目のないところで燃やすが、(それを)他の人にみせてはならない。黄色と黒色の犬の血をとり、ひそかに酒のなかに入れる。上梁(棟上げ)のとき、この酒を棟梁が三杯飲み、残りは順次、工匠たちに飲ませる。およそ魘魅があらわれると、(工匠は)おのずからその災厄を受けと

めるが、諸事はその符によって解消する。

この符は朱砂しゆさを用いて書き、符は正梁（大梁、主梁）に貼る。

黒枠の内に、当家の名字を書いて内に置いておく。書きおわつたら、墨でこれを塗りつぶす。符を貼るときは、左手でこれを持ち（上）のほり）梁に貼る。貼るときには、ほかの人間が無駄話をするのを許さない。貼りおわつたなら、梯はしをおりる。そこで青龍（東方）で清浄な水と米と化紙を混ぜ合わす。そしてそれを家堂に置く。衆聖が土地神とかまど神を接遇して、それぞれの位に安置する。かくて家堂に平安をもたらず真言を念じていう、

天は陽 地は陰、陰陽二気は神と化す。日月星の三光はあまねく照らし、めでたき光は門にふりそそぐ。かぐわしい香りがあったりに漂い、天の音楽が流れる。わが家堂に司命六神をお迎えす。萬年香る火がありて、永く家庭を鎮めん。邪悪なるものは入れず、水火の災害も浸せない。門神の武將は、（悪）鬼を誅殺す。神威は広大にして、その光明正大なり。太乙（北辰）の勅命は、久しくこの家の安泰を保つ。神をここに安んじおわり、永遠に大吉なれ。

### 三．相宅図（『魯班經』卷之三所収）

一．（原文）門高勝於廳、後代絶人丁。門高勝於壁、其法多哭泣。

（訓読）門高もんこう、廳おどに勝れば、後代ごだい人丁ひとていを絶つ。

門高 壁へきに勝れば、其それ法さだめて多く哭泣うてきす。

（通釈）（家の）門の高さが庁堂（客間）にまさつていれば、（その家は）末代になると、子孫が絶



える。門の高さが壁よりもまさつていれば、決まって哭泣することが多い。

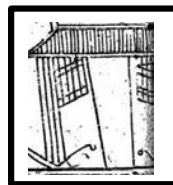
二．（原文）門柱不端正、斜欹多招病。家退禍頻生、人亡空怨命。

（訓読）門柱 端正ならずして、斜かために欹かたてば、

多く病を招く。家退けたいきて禍わざい頻しばしばりに生じ、人

亡なして空しく命を怨む。

（通釈）門柱がまっすぐに立たず、斜めに寄り



かかつていれば、（その家の人に）多くの病を招く。家は衰退して禍わざいが頻繁しばしばに生じ、住人は亡くなり、空しく運のないことをうらむようになる。

三．（原文）門扇或斜欹、夫婦不相宜。家財常耗散、更防人謀散。

（訓読）門扇もんせん 或あるいは斜かために欹かたてば、夫婦相あい宜よろからず。家財



は常に耗散し、更に防人 謀りて欺く。

(通釈) (家の) 門の扉が斜めになつていれば、(その家の) 夫婦仲はよくない。家財はいつも消散して、さらに門番が裏切りを働くことになる。

四、(原文) 門邊土壁要一般、左大換妻更遭官。右邊或大勝左邊、

孤寡兒孫常叫天。

(訓読) 門邊の土壁は一般を要す、左大なれば妻を換え更に官に遭う。右邊或いは左邊に大いに勝れば、孤寡にして兒孫 常に天に叫ぶ。



(通釈) (家の) 門の両側の土壁は左右同じにつくらなければならない、左の壁が大きければ(その家の主人は) 妻をかえて、さらにお上の手にかかる。右の壁があるいは左の壁より大き過ぎると、(その家は) 孤児や寡婦がでて、子孫は常に天にむかい泣き叫ぶようになる。

五、(原文) 門柱補接主凶灾。有(仔) 細巧安排。上頭目患中勞吐、

下補脚疾苦。

(訓読) 門柱 補い接げば凶灾を主る。仔細は巧みに安排す。上は頭目患い、中は勞吐し、下は脚を補い、疾み苦しむ。



(通釈) (家の) 門柱を継ぎ足して補修すると、(その家に) 凶災をもたらす原因となる。(門に) 手のこんだ細工を施す(と、そうなる)。上

部(を継ぎ足すと) 頭や目を患い、中部(を継ぎ足すと) 疲れて嘔吐し、下部(を継ぎ足すと) 自分の脚を継ぎ足して痛み苦しむことになる。

六、(原文) 門上莫作仰供裝。此物不為祥。兩邊相指、或無弁、

論訟口交爭。

(訓読) 門上に仰供の装を作る莫れ。此の物 祥と為さず。兩邊相指せば、或は弁無くして、論訟口交争う。



(通釈) (家の) 門の上に斗棋の裝飾をつくつてはならない。この組物は吉祥ではない。(斗棋が) 両辺を支えていると、(その家の人は) 自分から何もいわないのに、訴訟や口論に巻きこまれるようになる。

七、(原文) 門前壁破街磚缺、家中長不悅。小口注(枉) 死葉無醫、

急要修整莫遲運。

(訓読) 門前の壁破れ 街磚缺くれば、家中長く悦ばず。小口は枉死して葉もて醫すこと無し、急ぎ要らず修整して遅運たる莫かれ。

(通釈) (家の) 門前の壁面が破壊して磚がかけていると、(その) 家





族は不愉快なことが続く。子どもは横死することがあり、(病は)葉でも治らない。急いで修繕する必要がある。ぐずぐずしてはならない。

八. (原文) 門戸中間窟痕多、灾禍事交化。家招刺配遭非禍、瘡

黄(瘡)定不差。

(訓読) 門戸の中間に窟痕多ければ、灾禍ありて事は交も化す。家は刺配を招き、非禍に遭い、瘡瘡定めて差す。

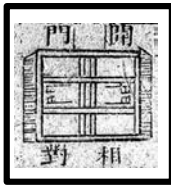


(通釈) (家の) 門の戸の中ほどに穴があいていると、(その家の人は) 災禍が多くふりかかり、やつかいな出来事がつきつきおこる。家人は刺青の刑に処して配流されるようなことがおこり、非業の災禍を招き、はやりやまいにかかり決まって治らない。

九. (原文) 二家不可門相對、必主一家退。開門不得兩相衝、必

有一家凶。

(訓読) 二家は門 相い對すべからず、必ず一家退くを主どる。門を開くに兩つながら相い衝くを得ず、必ず一家に凶有り。



(通釈) 二軒の家の門は向かい合つてはいけない。(そうすると) 必ずどちらか一軒が衰退する。門を開いたときに、二軒の門がつきあたる

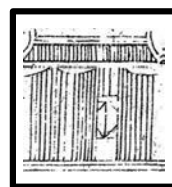
ようではいけない。(そうすると) かならずどちらか一軒に凶災がある。

十. (原文) 門板多穿破、怪異為凶禍。定主退財産。修補免貧寒。

(〔絵図魯班經〕による)

(訓読) 門板に穿破多ければ、怪異凶禍を為す。定めて財産を退くるを主どる。修補すれば貧寒を免がる。

(通釈) (家の) 門の板に穴や破れた部分が多いと、(その家では) 奇怪な魔物が凶禍をひき起こす。決まって財産を減らす原因になる。補修すれば、貧困を免れる。



いと、(その家では) 奇怪な魔物が凶禍をひき起こす。決まって財産を減らす原因になる。補修すれば、貧困を免れる。

十一. (原文) 門板莫令多柄節。生瘡疔不歇。三三兩兩或成行、

徒配出軍郎。

(訓読) 門板は柄節を多からしむる莫れ。瘡疔を生じて歇まず。三三兩兩 或いは行を成さば、徒配せられて軍郎を出だす。



(通釈) (家の) 門の板は多くの模様や木の節があつてはならない。(そんな材を用いると、その家人に) はれものが生じて治らない。(門の板に) 二つ三つ(節などが) 並んでいると、徒役徴用され、軍人を輩出することになる。



十二. (原文) 一家不可開二門、父子没慈恩。必招進舍噴門客。

時師須會識。

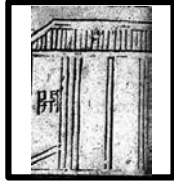


(訓説) 一家は二門を開くべからず。父子は慈恩を没おんう。必ず進舎を招き、門客を噴ふらす。時師は須らく會識すべし。

(通釈) ひとつの家にふたつの門を開けてはならない、(そうすると、その家では) 父と子の間に慈愛や恩義の念がなくなる。かならず出処進退をせまられ、門にやって来た客を怒らせる。占い師はそれを心得ておく必要がある。

十三. (原文) 一家若作兩門、出鰥寡多冤屈。不論家中正、主人大小自相凌。

小自相凌。

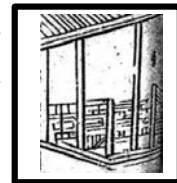


(訓説) 一家若し兩門を作らば、鰥寡かんかを出だし、冤屈えんくつ多し。家の正中を論ぜず、人 大小自ら相あひ凌あぐを主つかとる。

(通釈) ひとつの家に、もしふたつの門を作ると、(その家は) 鰥男や寡婦を出し、無実の罪にかかることが多い。家ではなにが正しいか論じることがなく、家人は老いも若きも相手に勝つことだけを考える原因になる。

十四. (原文) 人家天井置欄干、心痛藥醫難。更招眼障暗昏蒙。

雕花極是凶。



(訓説) 人家の天井に欄干らんかんを置かば、心痛ありて薬もて醫いし難かたし。更に眼障がんじょうを招き、暗く昏蒙こんもうたり。花を雕ほは極めて是れ凶なり。

(通釈) 人家の庭に欄干(手すりのある囲い)を設置すると、(その家の人は) 心痛がおこり薬でも治すことが難しい。さらに眼の障害を招き、失明してしまう。欄干に花を彫刻することは極めて凶である。

十五. (原文) 廳屋兩頭有屋橫、吹禍起紛紛。便言名曰擡(招)

喪山。人口不平安。



(訓説) 廳屋ちやうおく 兩頭に屋橫有れば、吹禍起ること紛紛ふんぶんたり。便言名づけて招喪山せうさうざんという。人口平穩ならず。

(通釈) (家に) 庁堂(客間)があつて(他家の) 左右両方の屋根が横から(向つてきて)沖すると、(その家では) 災禍がさかんに起こる。(このことを) うまく名づけて、「招喪山(死を招く山)」という。(その家の) 人々は平穩に過あせない。

十六．(原文) 當廳若作穿心梁、其家定不祥。便言名曰停喪山、

哭泣不會開。



(訓読) 廳ちやうに當あたりて若もし穿せん心梁しんりやうを作つくらば、其の家 定さだめて祥しやうならず。便言べんげん名なづけて停喪山ていさうざんと曰いう。哭泣こくき會あひつて開ひらかならず。

(通釈) (家の) 庁堂(客間)の前(の門)に、もし穴あきの梁を

造作すると、その家はきまつて不祥である。(これを)うまく名づけて、「停喪山(死を停める山)」という。(家人の)哭泣する声が途絶える(こと)はない。

十七．(原文) 門外置欄干、名曰紙錢山。家必多喪禍、恚惶實可憐。



(訓読) 門外かどに欄干らんかんを置おかば、名なづけて紙錢山しせんざんと曰いう。家いへは必かならず多おほく喪禍さうか、恚惶いこうなるは實じつに憐あはれむ可べし。

(通釈) (家の) 門の外側に欄干(手すりのついた囲い)を設置すると、(それを)名づけて「紙錢山」という。(その)家では必ず多く死を招く災禍がおこり、わずらいや悩みことさらにされて、実に憐れである。

十八．(原文) 人家相對倉門開、定斷有凶災。風疾時上(時)不可醫。世上少人知。



(訓読) 人家 相對あひまして倉門くらかど開ひらかば、定斷ていだんし凶災きようさい有り。風疾ふうしき時とき 醫いすべからず。世上人の知ること少なし。

(通釈) 人家(の門)に向き合つて倉の門が開いていると、(その家では)決まつて必ず凶災がある。伝染病が絶えずおこつて治すことができない。(このことを)世のなかで知る人は少ない。

十九．(原文) 西廊壁枋不相接、必主相離別。更出人□(心)不



伶俐。疾病誰醫治。  
(訓読) 西廊さいらうの壁枋かへい 相あい接せせざれば、必かならず相離別あひりべつするを主つとる。更さらに人心じんしん 伶俐れいりならざるをいだす。疾病しやうびつ誰たれか醫治いじせん。

(註) 底本、校勘本共「西廊」に作る。図をみれば、あるいは「兩廊」か。

(通釈) (家の東) 西の回廊の壁枋(横架材)が(門に)接続していないと、必ず(その家の人が)離別する原因となる。さらに(その家は)心が賢明でない人を輩出する。病気になつても誰も治せない。

二十・(原文) 禾倉背后作房間、名為疾病出(山)。連年因臥不



離床。癆病最恹恹(惶)。

(訓読) 禾倉の背后に房間を作る、名づけて疾病山と為す。連年因臥(茵臥)して床を離れず。癆病、最も恹恹たり。

(通釈) (家の) 禾の倉庫の背後に房間(寢室など)をつくる、(それを)「疾病山」と名づける。(その家の人は) 何年も寝込んで床を離れることがない。肺病になり、この上なくわずらい悩むことになる。

二十一・(原文) 人家方畔有禾倉、定有寡母坐中堂。若然架在天

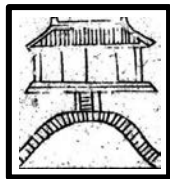


醫位、却宜醫術正相當。

(訓読) 人家の方畔に禾倉有らば、定めて寡母中堂に坐する有り。若し然らば架 天醫の位に在らば、却つて醫術の正に相い當たるに宜し。

(通釈) 人家の傍らの並びに禾の倉庫があると、(その家では) 決まつて未亡人が中心の堂に坐することになる。もしそうなると、架(稲をかける道具)が(八宅法でいう) 天医の方位にあれば、かえつて医術にびたりとあつていてよろしい。

二十二・(原文) 有路行來似鉄叉、父南子北不寧家。更言一拙誠



堪拙、典賣田園難免他(也)。

(訓読) 路有り、行來 鉄叉に似たれば、父は南し子は北して家に寧んぜず。更に言は一に拙誠堪拙にして、田園を典賣すること免れ難し。

(通釈) (家の前の) 路が鉄の草刈り鎌のように敷設してあると、(その家では) 父は南に行き、子は北に行つて、(ばらばらでその) 家に落ち着かない。さらにまことに口下手で、誠意があつてもはなはだ世渡りがへたで、田畑を売ること免れがたい。

二十三・(原文) 路如牛尾不相和、頭尾翻舒反背吟、父子相離真



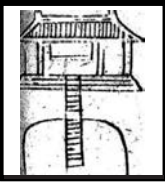
未免。女(婦) 人要嫁待如何。

(訓読) 路 牛尾の如く相い和せず、頭尾翻舒して反背して吟ずれば、父子相い離ること、真に未だ免れず、婦人の嫁に要めて如何を待つ。

(通釈) (家の前の) 路が牛の尾のように(くるつと巻いて) 頭尾がゆるやかにひるがえり、背いた形であると、(その家は) 父と子が離ればなれになることは間違いない。妻は嫁にたよつて指示を待つようになる。

二十四 (原文) 路若鈔羅與銅角、積招疾病無人覺。瘟瘟 (疫)

痲痘若相侵。痢疾師巫方有法。



(訓読) 路 鈔羅と銅角の若くならば、積もりて疾病を招きて、人 覚ゆるなし。瘟疫 痲痘は相い侵さるるが若し。痢疾は師巫方に法有り。

(通釈) (家の前の) 路が丸い銅器か楽器の銅角のようであると、(そ

の家の人は) 徐々に疾病が積もっていくが、人はそれに気づかない。はやりやまいやしびれのある疱瘡におかされるようになる。下痢の病は巫者に (治す) 方法がある。

二十五 (原文) 人家不宜居水閣。過房并接脚。兩邊池水大侵門、

流傳 (得) 兒孫好大脚。



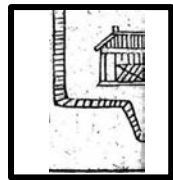
(訓読) 人家は宜しく閣に居るべからず。房を過ぎ并びに脚に接す。兩邊の池水大いに門を侵し、兒孫を流得すれば、大脚を好む。

(通釈) 人家は水閣に住むのはよろしくない。

(水が) 居室の下を流れ、家の脚部 (基礎) が水に接している (家をさす)。建物の両側の池の水が、ひたひたと門を浸していると、(その家の) 子や孫を流す (恐れがある) ので、大きな脚 (の基礎を造るの) が好ましい。

二十六 (原文) 故身一路横哀哉。屈屈來朝入亢 (蛇) 蛇、家宅

不安死外地。不宜牆壁反教餘 (差)。



(訓読) 故身 一路横たわりて、哀しきかな。屈屈として來たり、朝い入りて蛇蛇たらば、家宅安らかならずして、外地に死す。牆壁に宜しからず、教に反して差う。

(通釈) 古い刀身のような一本道が横たわっていて、さびれている。(その道が) 曲がりくねり、くねくねと家に向かつて入って来ると、(その) 家宅の住人は安住せず、外の土地で死ぬ。(また) 牆壁を作るのに不向きで、定則どおりにいかない。

二十七 (原文) 方來不滿破分田。十相人中有不全。成敗又多徒

費力。生難出去豈無還。



(訓読) 方びに來たるも田を破分するに満たず。十相の人 中に全からざる有り。成敗して又た力を徒費すること多し。生きて出去し難し、豈ど還ること無からん。

(通釈) (家の前にこのような道があると) 同じように肩をならべてやって来ても、みんなに田を分割するに十分ではない。(その家の田を) 十人の人に分けても、中にはうまく立ち行かない者がいる。うまく

いったりいかなかったり、またむだに力を費やすことが多い。生きて（この家を）出て行くことは難しく、ほとんど帰還する者はいない。

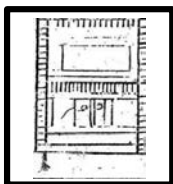


二十八. (原文) 門高疊疊似灵(靈)山、但合僧堂道院看。一直

到門無曲折。其家終冷也孤單。

(訓読) 門高く疊疊たること靈山に似たり、但だ僧堂と道院を合わせて看る。一直一門に到りて曲折するなし。其の家終に冷に、也た孤單たり。

(通釈) (家の) 門が高く積み重なっていて靈山のように(な家)であり、僧堂と道観を合わせたようにみえる。(道が) まっすぐ門に達して曲折していない、(そうすると) その家はいつまでも冷えきっていて、(世間から) 孤絶している。



二十九. (原文) 四方方正名金斗。富足田園(園) 粮萬畝。離墻

回環無破陷、年年進益添人口。

(訓読) 四方方正なるは金斗と名づく。富足りて田園の粮 萬畝あり。離墻 回環して破陷無くんば、年年進益して人口を添う。

(通釈) (家の門の) 四方がきつちり平らである(家)は、「金斗(金の柁)」と名づける。(その家は) 富が充足して、穀物を育てる田畑が

萬畝もある。塀が周囲にめぐらされていて、破れや崩れがなければ、年々収益が増進して、家人が増えていく。



三十. (原文) 牆垣如弓抱、多(名) 日進田山。富足人財好、更

有清貴官。

(訓読) 牆垣 弓の如く抱く、名づけて進田山と曰う。富足りて人財好く、更に清貴の官有り。

(通釈) (家の前の) 塀が弓なりに曲がっている、これを名づけて「進田山」という。(その家は) 人も財産も大いに充足してよろしい。さらに清廉で高位の官僚を出す。



三十一. (原文) 屋前行路漸漸大、人口常安泰。更有朝水向前來、

日日進錢財。

(訓読) 屋前の行路 漸漸として大なれば、人口は常に安泰なり。更に朝水 前に向かいて來たる有らば、日日 錢財を進む。

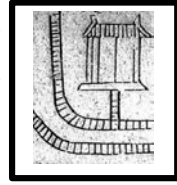
(通釈) 家の前の道路が徐々に広がっていけば、(その家の) 住人は常に安泰である。さらに(家の前に) こちらに向かってくる水があると、日一日と財産が増えていく。

三十二、(原文) 一重城抱一江纏、若有重城積産銭。雖是富榮無

禍患。祇宜抱子度晚年。

(訓読) 一重の城 一江を纏て抱き、若しくは

重城有らば、銭を積産す。是れ富榮なりと雖も  
 禍患無し。祇に子を抱きて晩年を度るに宜し。



(通釈) 一重の城壁が一本の川をまとうように抱いているか、または

二重の城壁があると、(その家は 銭を産み出し積み上げていく。これは富貴であつても禍患はない。まさにわが子を抱いて晩年を過ごすのに向いている。

三十三、(原文) 南方若遠有尖石、代代火烧宅。大高火起火成山。

烧盡不為難。

(訓読) 南方に若し遠く尖石有らば、代代宅を火烧す。大いに高ければ火起こり、火は山

を成す。烧き盡すは難しと為さず。



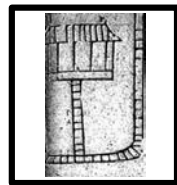
(通釈) (家の) 南方の遠くに尖った石があると、代々その家は火事で焼ける。(尖った石が) 大きくて高ければ、火事が起こると火は山のように燃え上がり、たやすく焼き尽くしてしまう。

三十四、(原文) 展帛(帛) 回来欲捲舒。辨銭田即在方隅、中男

長位須先發。人言此位鬼神扶。

(訓読) 展帛 回来して捲舒せんと欲す。銭

田を辨じて、即し方隅に在らば、中男の長位  
 須らく先ず發すべし。人は言う、此の位は鬼神  
 扶く、と。



(通釈) (家の前の路が) 伸びて(家を) 吊るように取り巻き、巻きあがる形になっている。もし(この家がその道の) 曲がり角に位置していると、財産や田を運用した場合、中男が長の地位に真つ先に昇る。人は言う、こういう地位は鬼神が扶助してくれる、と。

三十五、(原文) 品岩嵯峨似浄瓶、家出素衣僧。更主人家出孤寡、

官更相傳有。

(訓読) 品岩 嵯峨として浄瓶に似たれば、

家は素衣の僧を出す。更に人家は孤寡を出すを  
 主とする。官は更に相い傳うる有り。



(通釈) (家の前に) 積み上げた石がごっこつしで浄瓶に似ていると、その家は白衣の僧を出す。さらに孤児や寡婦を出す原因となる。その官位はさらに子孫に伝えられることもある。



三十六 (原文) 石頭屋後起三堆、倉庫積禾囤 (囤)。石藏屋後土

般般、潭日更清閑。

(訓読) 石頭 屋後に三堆を起せば、倉庫は  
禾囤を積む。石藏 屋後の土 般般たれば、潭  
日更に清閑たり。

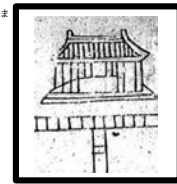
(通釈) 石頭 (岩山) が家の背後に三つ積みあがっていると、(その家の) 倉庫は穀物を積みあげるようになる。石藏が家の背後にあつて地面が美しく整えられていると、落ち着いた日々はさらに清らかで静かなものになる。

三十七 (原文) 路如跪膝不風光、輕輕乍富便更張。只因笑死渾閑事、脚病常常不離床。



(訓読) 路 跪膝の如くにして風光あらざれば、輕輕として乍ち富みて便ち更に張る。只だ笑死に因りて閑事を渾す。脚病ありて常常床を離れず。

(通釈) (家の門前の) 路がひざまずく形をして風光がひらけていないと、(その家は) 軽々とたちまち富を手にし、さらにだんだん増えていく。ただ笑いころげてひまをつぶす。(働かないから) 脚の病が常にあつて病床から離れることができない。



三十八 (原文) 路如丁字損人丁。前低蕩去不堪行。或然平生猶

輕可。也主離鄉亦主貧。

(訓読) 路 丁字の如きは人丁を損なう。前低く蕩く去らば、行くに堪えず。或然は平生猶お軽きこと可なり。也た郷を離るるを主り、

亦た貧を主る。

(通釈) (家の門前の) 路が丁字のようになっていると、(その家の) 人々を損なう。(家の) 前の路が低く下り、ずっと伸びていると、(その家人は) 歩くのに不自由する。場合によっては、平生はまだ苦勞なく暮らすことができるかもしれない。(しかし) また故郷を離れる原因にもなり、また貧困の原因にもなる。

三十九 (原文) 路成八 (丁) 字害難逃。有口何能下一挑。死別生離事 (真) 似苦。門前有此非吉兆。



(訓読) 路 丁字を成さば、害 逃れ難し。口有れども何ぞ能く下ること 一挑ならん。死別生離 真に苦に似たり。門前に此れ有るは吉兆に非ず。

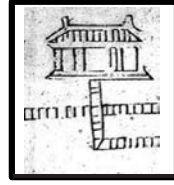
(通釈) (家の門前の) 路が丁字になっていると、(その家は) 災害を逃れることは難しい。出口があつても、(何か起こったとき) ひとつとび



できない。死に別れたり生き別れたりして、まことに苦しむことになる。門前にこの形があるのは、吉兆ではない。

四十．(原文) 左邊七字須端正、方斷財山定。或然一似死鴨形、

日日間相爭。



(訓読) 左邊に七の字の須(鬚) 端正ならば、方に斷じて財山定まる。或然は一に死せる鴨の形に似ば、日日間しく相い争う。

(通釈) (家の前の) 左側に七の字のような路があり、(七の字の二画目の) 払いの画がきちんと整つていれば、まさに必ず財産の山をきづくようになる。あるいは、もし路が死んだ鴨の形に似ていると、日々騒がしく、相い争うことになる。

四十一．(原文) 土堆似人欄路抵、自縊不由賢。若在田中却是牛

(吉)。名為印綬保于年。



(訓読) 土堆 人に似て欄路 抵る。自ら縊らば賢に由らず。もし田中に在らば、却て是れ吉。名づけて印綬と為し、年を保つ。

(通釈) (家の前の) 土盛りが人の形に似ており、囲いの路が触れていて、(それが) 自分の首をくくつているかたちをしていると、(その家

の人は) 賢明ではない。(もし土盛りが) 田の中にあると、(その家は) かえつて吉である。それを名づけて「印綬」といい、(家人は印綬を授かる身分を) 長年保つことになる。

四十二．(原文) 若見門前七字去、斷作辨金路。其家富貴足錢財。

金玉似山堆。



(訓読) 若し門前に七字の去るを見れば、斷じて辨金路と作す。其の家 富貴にして錢財を足らす。金玉は山堆の似し。

(通釈) もし(家の) 門前に七の字の形をした路が伸びていると、必ず「弁金路(金銀財宝を集める路)」となる。その家は富貴で十分な財産を蓄える。金銀宝玉が山のように堆積する。

四十三．(原文) 門前土堆如人背、上頭生石山(出) 徒配。自他

漸漸生茅草、家口常憂惱。



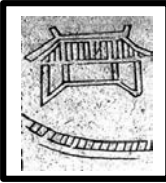
(訓読) 門前の土堆 人の背の如くにして、上頭に石を生ずれば、徒配を出す。自他 漸漸として茅草を生じ、家口 常に憂惱す。

(通釈) (家の) 門前の土盛りが人の背のようであり、上部に石が出ていると、(その家は) 配流の憂き目にあう。家の内外に次第に茅が

生え（没落する）ようになり、家人は常に憂いや苦しみにみまわれる。

#### 四十四 (原文) 右邊墻路如直出、時時叫冤屈。怨嫌無好大 (丈)

夫鬼（兒）、代代出生離。

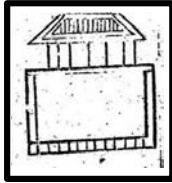


（訓読）右邊の墻路 直出するが如きは、時時 冤屈を叫ぶ。怨嫌して好丈夫の兒無く、代代 生離を出す。

（通釈）（家の前の）右側の土壁沿いに囲いのある路が真っ直ぐ走っていると、（その家は）いつも無実の罪を訴えるようになる。怨みやつらみばかりで好男子は出ず、代々生き離れになる者を出す。

#### 四十五 (原文) 門前土墻如曲尺、進契人家吉。或然曲尺向外長

妻婿哭分張。



（訓読）門前の土墻 曲尺の如きは、進んで人家と契りて吉なり。或然は曲尺 外に向いて長ければ、妻婿 哭して分張す。

（通釈）（家の）門前の土塀が曲尺のようだと、（その家では）進んでよその家と交際して吉である。あるいは、もし曲尺が外に向かつて長くのびていると、妻とむこは泣いてけんかばかりするようになる。

### おわりに

この訳注では、まず最初に「魯班仙師源流」をとりあげた。ここでは魯班という人物の経歴と、彼が古くから工匠の世界で尊崇されてきた所以を述べる。また「魯班経」が著述された明代には、魯班を祀る靈廟が建立され、その扁額には「魯班門」と記されて「待詔輔國太師北成候」の封号を授けられたこと、春と秋の祭祀には、牛・羊・豚を供える太牢の儀礼を用いたことを紹介している。

つぎにとりあげた「靈驅解法洞明真言秘書」では、建築を執り行う際、棟梁を中心とした工匠の修祓の儀式の内容を挙げるが、上梁（棟上げ）に用いる対聯の由来を、唐の李淳風、袁天罡、唐の皇帝、太宗の逸話にもとづいて述べる。

古来中国では、家屋などの造営における上梁（棟上げ）の時、「上梁正遇紫微星」、「立柱喜逢黃道日」などの七文字のめでたい対句を書き、両柱に「対聯」として貼る習俗があった。その際、大梁には横額として、「上梁大吉」のような四文字の吉句を貼った。そして、「上梁」の日は曆注をみて、「黃道吉日」などの吉日を選んだ。儀式では「上梁歌」を唄い、祭神に供え物を捧げた。これらを行うことで、工事がとどこおりなく進んで家の普請がおわり、その家に住む家人の末長い平安を願ったのである。現代中国ではこうした習俗が行われること

は少なくともあったが、近年では、これらの伝統的習俗が見直される傾向がうかがえる。

これらの習俗は、日本でも共通してみられる。たとえば、中国の工匠のなかでは魯班が尊崇されたが、日本では江戸時代の宮大工のあいだにおいて、法隆寺の建立を命じた聖徳太子が尊崇された。また、古くから建築をとり行なう際、大工の棟梁らはさまざまな儀式を執り行なうてきたが、ことに棟上げの儀式は、現代においても重視されている。

また、「魯班先師秘符」では、家屋を造営する際の儀式にあたって、木匠（大工）や石匠（石工）、泥水匠（左官）、もろもろの工匠たちが、故意に蠱毒や魔魅で（その家屋の）主人に災禍をもたらすことのないよう、留意するとある。宋の孔平仲撰『（孔子）談苑』に、「家屋を造営するとき、（家の）主人が工匠をいたわらないと、工匠は（ある）方法を用いて主人に呪いをかける。（それは）木の上の部分の鋭くして下の部分を大きくする、こうして大きな木を削って小さくしたものを、倒さまして（宅地内に）突き刺しておく。このようなことは凶である。サイカチの木で入口の門を作る。このようなことも凶である。（造屋主人不恤匠者、則匠者以法魔主人。木上鋭下壯、乃削大就小倒植之。如是者凶。以皂角木作門闕。如是者凶。）」とある。したがって、施主と工匠の人間関係にも配慮したのである。

家にもたらす災禍を防ぐものとして、さまざまな禳解類も紹介して

いる。たとえば、「瓦將軍」や「獸牌」は、隣家の屋根の頂きや屋根の傾きの尖った部分などが自分の家のほうに向つて射る形になつていことを防御するために設置し、その邪気を忌避するためのものである。ほかに、「倒鏡」「飛虎將軍」なども同じ目的で用いられた。

「泰山石敢當」も取り上げているが、これは道のつきあたるところや門に置くことが多い。この泰山は中国の五岳のうちの東岳であり、その神、泰山府君は人の生死をつかさどるとされたが、そうした靈力にあやかるとして、これが習俗化したのであろう。その後、中国から東アジアに広く伝播し、沖繩ではこの習俗が根強く残っている。さらに居宅内において避けるべき符や飾り物、また吉祥の符もとり挙げられている。たとえば、居宅内に置くとよいとされるものとしては、松枝は家の主人の長寿を、竹の葉に大吉、太平、平安と書写したものは、吉祥につながるものとして挙げられている。これらは、冬でも青々とした緑をしていることで、吉祥のシンボルとされた。

住まいは、古くから人の長寿と深く関わるものと考えられてきた。人々は種々の方法、手段を用い、邪気を祓い、凶を除き、吉福を得ることを求めたが、工匠は、そこに深く関与していたのである。